

武家故實祝事大既示

飯島勝休編輯

上

			二	和
			八	書
			二	門
			〇	
三	四	六	〇	類
冊	架	函	號	

320

庫	文	閣	内	
一	二			和
〇	八			書
三	二			
〇	〇			類
架	冊	號		

内閣文庫	
番號	和 28220
冊數	3 (1)
函號	153 320

153-320



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

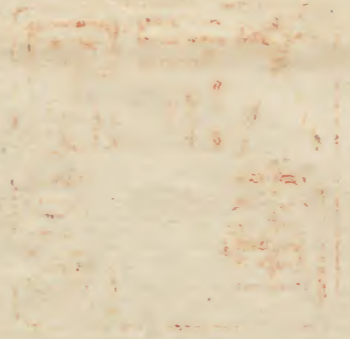
Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



體



終式よりおぼろげにたると

は、そのまゝのまゝに、

そのまゝのまゝに、

そのまゝのまゝに、

そのまゝのまゝに、

そのまゝのまゝに、

そのまゝのまゝに、

そのまゝのまゝに、



明治十五年納本



あつたにわさつちうらむとあつた
これ少くものうねえさねハ
まつたにわさつちうらむとあつた
あつたにわさつちうらむとあつた
あつたにわさつちうらむとあつた
あつたにわさつちうらむとあつた
あつたにわさつちうらむとあつた
あつたにわさつちうらむとあつた

あつたにわさつちうらむとあつた
あつたにわさつちうらむとあつた
あつたにわさつちうらむとあつた
あつたにわさつちうらむとあつた
あつたにわさつちうらむとあつた
あつたにわさつちうらむとあつた
あつたにわさつちうらむとあつた
あつたにわさつちうらむとあつた

腸
痛

うらやまをいふに似せまはら
らるるのやうにけしめぬうらや
まのつとめおのりてしるふと
くまのたのむのしるふとくま
はく—はくまのうらやまをいふ
うらやまのつとめおのりてし
るふとくまのうらやまをいふ
うらやまのつとめおのりてし
るふとくまのうらやまをいふ

うらやまのつとめおのりてし
るふとくまのうらやまをいふ
うらやまのつとめおのりてし
るふとくまのうらやまをいふ
うらやまのつとめおのりてし
るふとくまのうらやまをいふ
うらやまのつとめおのりてし
るふとくまのうらやまをいふ
うらやまのつとめおのりてし
るふとくまのうらやまをいふ

嘉永三年十月

窪田信春

しつらふちんさのひをさりら
らるぬえらうのれぬのぬらうか
せらあつぬらうのさるしつら
らるぬえのぬらうのさるしつら
はくしつらぬえのぬらうのさるしつら
らるぬえのぬらうのさるしつら
らるぬえのぬらうのさるしつら
らるぬえのぬらうのさるしつら

らるぬえのぬらうのさるしつら
らるぬえのぬらうのさるしつら
らるぬえのぬらうのさるしつら
らるぬえのぬらうのさるしつら
らるぬえのぬらうのさるしつら
らるぬえのぬらうのさるしつら
らるぬえのぬらうのさるしつら
らるぬえのぬらうのさるしつら
らるぬえのぬらうのさるしつら
らるぬえのぬらうのさるしつら

嘉永三年十月

窪田清春

伊勢家の事と京師將軍家殿中
の禮式を法とすことと也小笠原の射藝
也と果終り又大伴左京亮有成
入道道禪と鎌倉將軍家は仕
弓馬の故實殿中の禮儀も精
かりとくば元弘三年鎌倉の滅後
伊勢守貞継波道禪と我家も精

—入る馬鞍殿中故實と
尋問あり—わお道禪其志の深切なるを
喜ぶ其秘伝を相傳はるあり—彼書
の伊勢家よ今よ残り傳はり—事とあま
福く人の志す所なり—予う家やと勇祖又
正勝祖父勝興伊勢貞丈貞教兩先師
より傳へし道に書傳はるぬ又父勝治と貞
春師より傳へし—わお勝傳はるあり

—その書の致意百の卷よりなりぬるが
中やと元服婚禮産前の書々安齋
翁及心齋師の書よりなり—法式し不
書は傳はるなり—祝事の—これれ
あり今やよりありの類を分るるを
祝事古説の大概をよきとき—予う門不
遊よ後生の業よ示—ぬるの詳
たの事—傳書よりなり—

嘉永三年庚戌九月廿八日誌

飯島氏源勝休 附

祝事大概目録

- 一 男子女子髪置 四十五ヶ条
- 一 深曾岐 十一ヶ条
- 一 帯直 七ヶ条
- 一 い多子餅 四ヶ条
- 一 男子袴着 十一ヶ条
- 一 女子袴着 十ヶ条
- 一 童女鉄醬附初并 武士鉄醬附 三十九ヶ条
- 一 下帯 男女 三ヶ条
- 一 鎧着初 五十八ヶ条



尹執家傳來武家故實稅事大概

上之卷

信濃松城藩 飯島與作源勝休偏集

男子女子髮置

一 永享八年十二月廿五日義勝云源繁五三歳の時也次身之内御々一乞の給
 源新次わかきともいふ源次郎の二子後を有す其後源新次郎大
 口佃長源地白唐或抄源後石分み亀の甲有くして一其の供御真菜税也も源向を
 其後源生金大口と有す源地白子初源後相屋孝源新次郎源播佐有せり
 三歳少く髪置の税を乞ふたやういふをさくく下への侍ハ上下三歳以上
 云をさくく又負衣袴同上少くは男ハ一付袴を乞ふため三歳の後
 置い息を乞ふ向ちやういふ髪置の税はむ皮さくちねさるゝ其後向白子
 ねい息を乞ふ向ちやういふ髪置の税はむ皮さくちねさるゝ其後向白子

花を給うさしてあきつめひも 女房取は等の文として 九三威
の時髪を束よ袴志とて 女房取は等の文として 九三威

一 御へ玉の初とまひひのうきをも 九三威 御へ玉の初とまひひのうきをも

一 文明十二年十一月廿四日今日三歳有髪置祝着儀 御儀

一 仁治二年八月十七日若君御前御生髪 頼嗣云 勝保云生髪と

一 寛正六年十一月廿六日今日有御生髪置御祝云 是東山殿

義政代のころなり

一 髪を男子とて三の年女子とての幸何月まると吉日をたてしむ

祝といふも 一は時する事ありき 祝といふも 一は時する事ありき

一 祝日に鬼宿日とて 外は吉日とて 祝日に鬼宿日とて 外は吉日とて

子孫繁昌して 同おとな 子孫繁昌して 同おとな

一 床席の事 床は三陽射せを 床席の事 床は三陽射せを

仁重折一付置鳥置 紐手拭れ多也 仁重折一付置鳥置 紐手拭れ多也

一 祝の節日 又其節日の早好 祝の節日 又其節日の早好

御へ玉の初 包取木の冠色 御へ玉の初 包取木の冠色

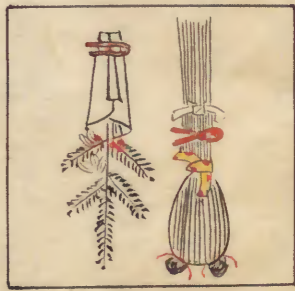
祝の節日 又其節日の早好 祝の節日 又其節日の早好

一 夫婦の人々の能 おとこ 夫婦の人々の能 おとこ

一 志の如く御禮 おとこ 志の如く御禮 おとこ

のよりくちを廣くうを扶膝に赤乱花をく——巾を包ちく出さし
 花あま中座し——はくたいてはつ時ゆめのとせと見又におと
 き人よとせ出くお児を音方よ向りせし御能とふせし——
 一 太のぬきをよ向しりし時夫婦をいさして夫はさうの屋をさる
 の前のたのちよむてお児の前よか——しよる——帰ハ赤乱花と赤児
 の前の右の振よむてお児のたのち通しのとせよう——しよる——扱夫
 白髪を取てうあせし時帰よとせ——川をと——ふし——
 一 太のぬきをさして扱お児の後よむりか——しよる時帰しけりお
 をわくお児のたの後の方よむ時夫く——かういをなとせ——のたの
 をく——しよる——三まうくしよる——かききこりきこりて——
 く——かきと赤乱花は初む——しよるふとく——おら小松橋にあらり
 おらす共おらるるの中よむお相更婦は退くし別人おらる
 した赤乱花を二取て退——

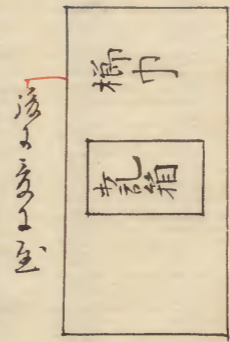
一 女子の髪をうくハ夫のすうふを帰つとむ——婦のすうふハはつと
 む——社外登りしめ——但たのむんし先ふりき初るし
 一 音方ハ玉女の方又ハ聞神の方あををえし玉女の方ハ其日のエト
 たり社九ツ目よああるしむ——子の日あれを子丑寅卯辰巳午未申
 しくとく西南の方申の方向をせし玉女の方と——お方うき
 ぐ——しよる聞神の方を用——寅神の方ハ其日の文より二目也



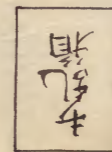
えりしちりしは、こいらのちを欠
け持てて、お児の前よかき、あま
り、こいらのちを、我より、か
ま、のこ、り、ち、り、但、こ、れ、有、り

男子の時、夫は、あま、り、
女子の時、夫は、あま、り、

男子の時、夫は、あま、り、
女子の時、夫は、あま、り、



男子の時、夫は、あま、り、
女子の時、夫は、あま、り、

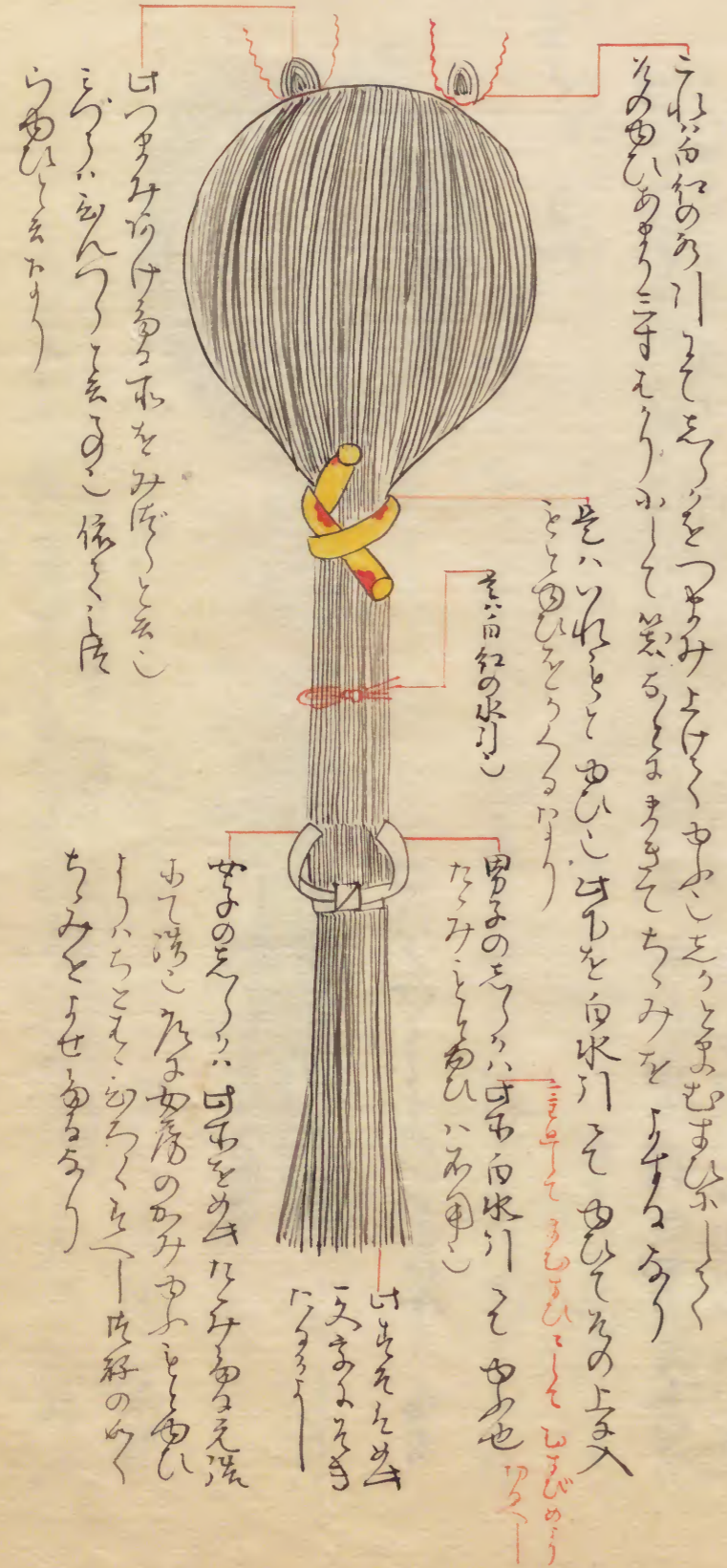


男子の時、夫は、あま、り、
女子の時、夫は、あま、り、

一 太の儀式終り、手懸式三秋七六三の祝有、一、おくの分儀は、随也、一
一 ち、り、し、ち、り、し、は、こいらのちを、欠、け、持、て、て、お、児、の、前、よ、か、き、あ、ま、り、
こいらのちを、我より、かま、のこ、り、ち、り、但、こ、れ、有、り

一 太の儀式終り、手懸式三秋七六三の祝有、一、おくの分儀は、随也、一
一 ち、り、し、ち、り、し、は、こいらのちを、欠、け、持、て、て、お、児、の、前、よ、か、き、あ、ま、り、
こいらのちを、我より、かま、のこ、り、ち、り、但、こ、れ、有、り

ち、り、し、ち、り、し、は、こいらのちを、欠、け、持、て、て、お、児、の、前、よ、か、き、あ、ま、り、
こいらのちを、我より、かま、のこ、り、ち、り、但、こ、れ、有、り



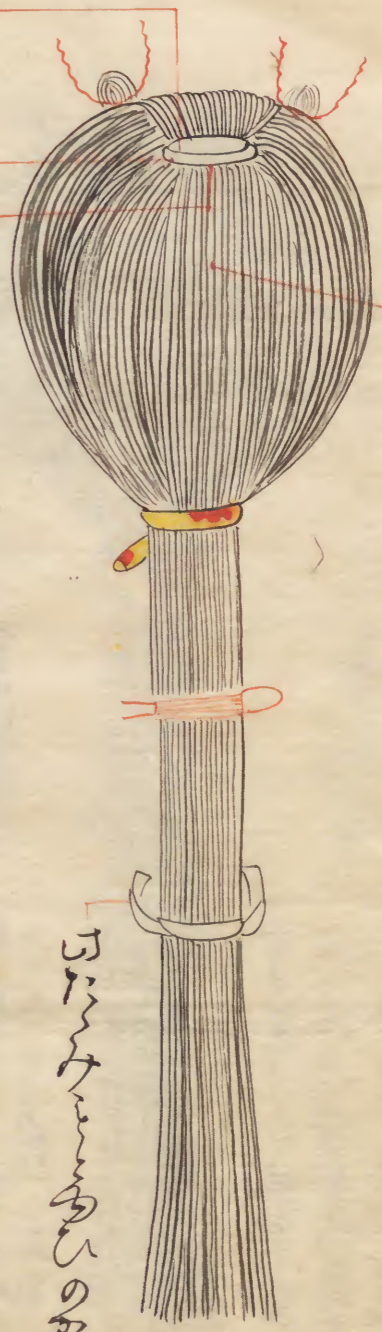
こいらのちを、我より、かま、のこ、り、ち、り、但、こ、れ、有、り

こいらのちを、我より、かま、のこ、り、ち、り、但、こ、れ、有、り

こいらのちを、我より、かま、のこ、り、ち、り、但、こ、れ、有、り

まじり前の髪

はまじり前の髪は、髪を束ねて、その束の先を丸く結ぶ。この丸い結を「まじり」の結と云ふ。この結の形は、丸い玉の形に似てゐる。この結の大きさは、髪の色や髪質によつて異なる。この結は、髪を束ねる時に、髪を束ねる糸を、この結の裏側から通して、束ねる。この結は、髪を束ねる時に、髪を束ねる糸を、この結の裏側から通して、束ねる。



まじり
まじり

はまじり前の髪は、髪を束ねて、その束の先を丸く結ぶ。この丸い結を「まじり」の結と云ふ。この結の大きさは、髪の色や髪質によつて異なる。この結は、髪を束ねる時に、髪を束ねる糸を、この結の裏側から通して、束ねる。この結は、髪を束ねる時に、髪を束ねる糸を、この結の裏側から通して、束ねる。

一 まじり前の髪は、髪を束ねて、その束の先を丸く結ぶ。この丸い結を「まじり」の結と云ふ。この結の大きさは、髪の色や髪質によつて異なる。この結は、髪を束ねる時に、髪を束ねる糸を、この結の裏側から通して、束ねる。この結は、髪を束ねる時に、髪を束ねる糸を、この結の裏側から通して、束ねる。

又入る髪の下は、髪を束ねて、その束の先を丸く結ぶ。この丸い結を「まじり」の結と云ふ。この結の大きさは、髪の色や髪質によつて異なる。この結は、髪を束ねる時に、髪を束ねる糸を、この結の裏側から通して、束ねる。この結は、髪を束ねる時に、髪を束ねる糸を、この結の裏側から通して、束ねる。

一 まじり前の髪は、髪を束ねて、その束の先を丸く結ぶ。この丸い結を「まじり」の結と云ふ。この結の大きさは、髪の色や髪質によつて異なる。この結は、髪を束ねる時に、髪を束ねる糸を、この結の裏側から通して、束ねる。この結は、髪を束ねる時に、髪を束ねる糸を、この結の裏側から通して、束ねる。

しすどまきものりうたよ女房札の用は時女の手のさ指のやま
 物りまき

しすどまきものりうたよ

あそびに丸くして中とハ
 ひくすまき



地の金をくまてたきて雲
 形松竹唐亀を走くまき
 新い連きよひ城及う方
 まくつら也
 いまも由ひく大いあひ
 又忍とよめひとせ云

たの用々々
 へんまのふん

まきまき山たらしれ色もり

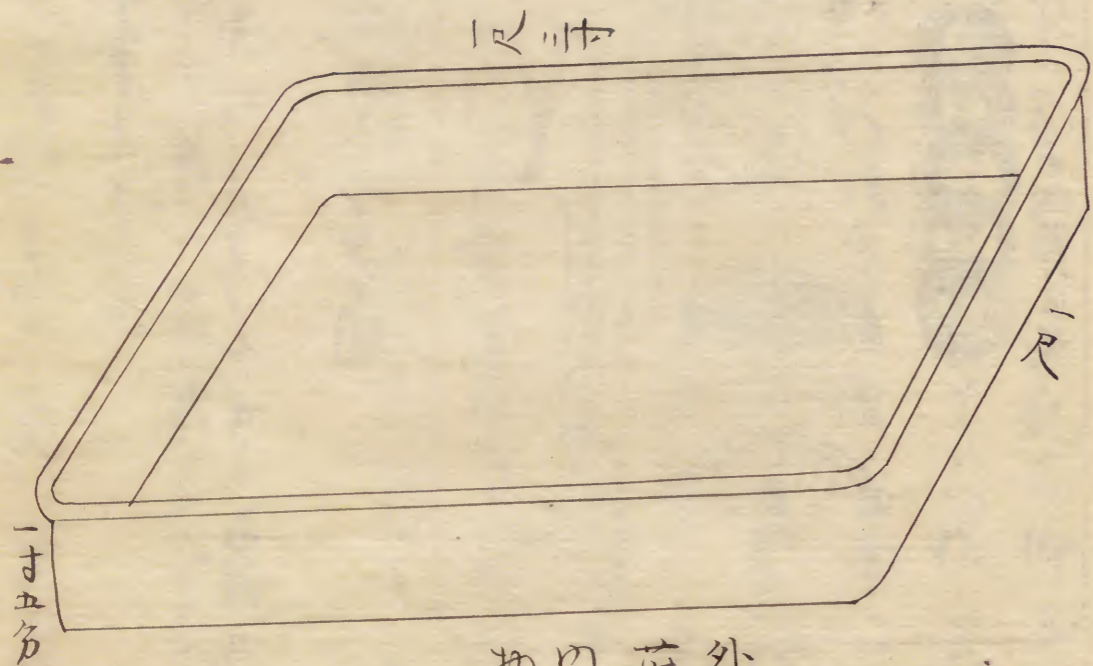


松竹まきと色くす山たらしれ冬の香花もいふまきうたよ
 くまきまきうたよまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき
 山たらしれまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき

一 女房札をまきのかけよからめる一 時女の手のさ指のやま
 法ら一 大狩をサ一尺三寸横一尺ふまき一すあか斗よまき一將軍
 義教御元服記まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき

内とほりの口一尺三寸を稱の飛も名のうけめめく角くとりうとけて
 つけのこくくゆちとせうありて木をて作らる貝をて致を入或
 可地よき後思ゆつちき陰まもり或を張まると湯をまて
 休痛とらとらあり身のをとくうたてくゆと一尺の内とを將軍
 家よと各地の沸とくくもせらる大名ゆを減とめたりとく
 とく一尺とせうとらありてゆのの髪貝とを測めく髪とせうと
 一むる時用らるなり無なりあり髪を又とえ後の時ありてと
 たよと用らるものあり又とん貝のこよありすゆのこひるとと
 とのらゆあり

おけの入りかたの図



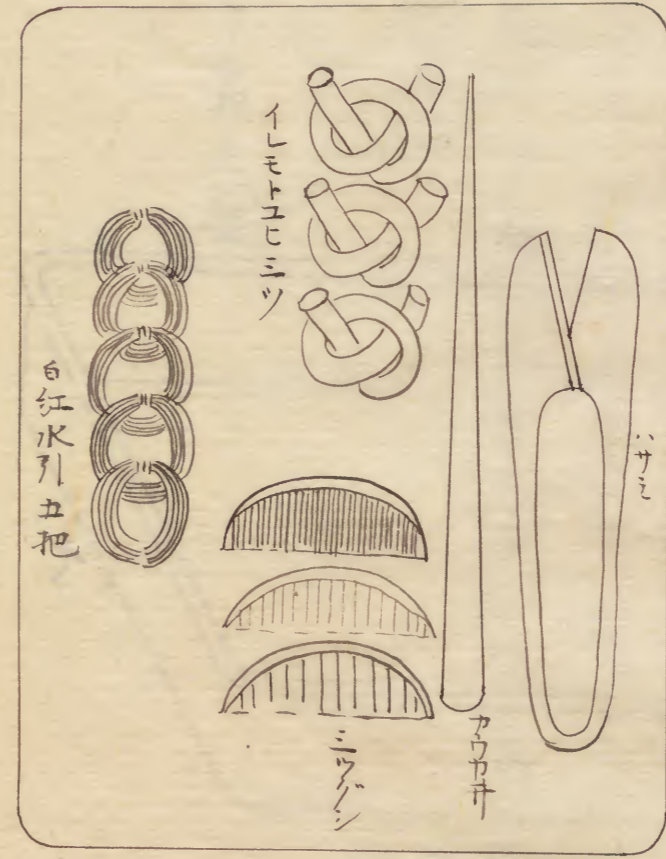
外層木青貝
 内層木
 口の縁は外層
 物を張る

一 折紙を入物の男子の髪をあらうとせしめ一丁のこくゆひとら

一 白紅水引五把
 一 紐
 一 中
 一 下入
 一 白紅水引五把

解とは... 中... 白紅水引五把

右と少通具折札おまろの図

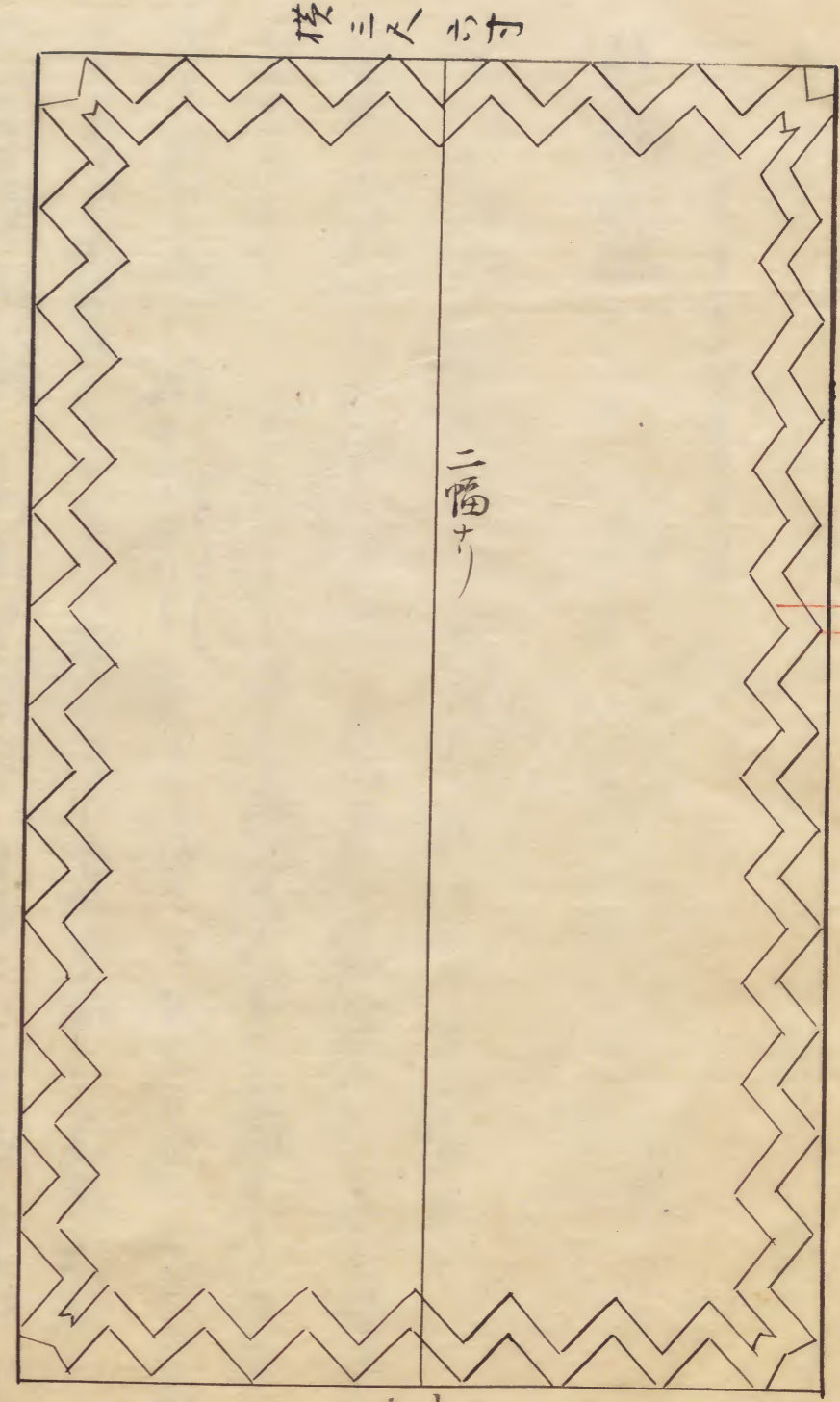


一 柳中を贅具のりよ... 柳中長サ... 柳中長サ... 柳中長サ...

柳中之圖

クニタナコヒトモ云是本名也

長さ尺

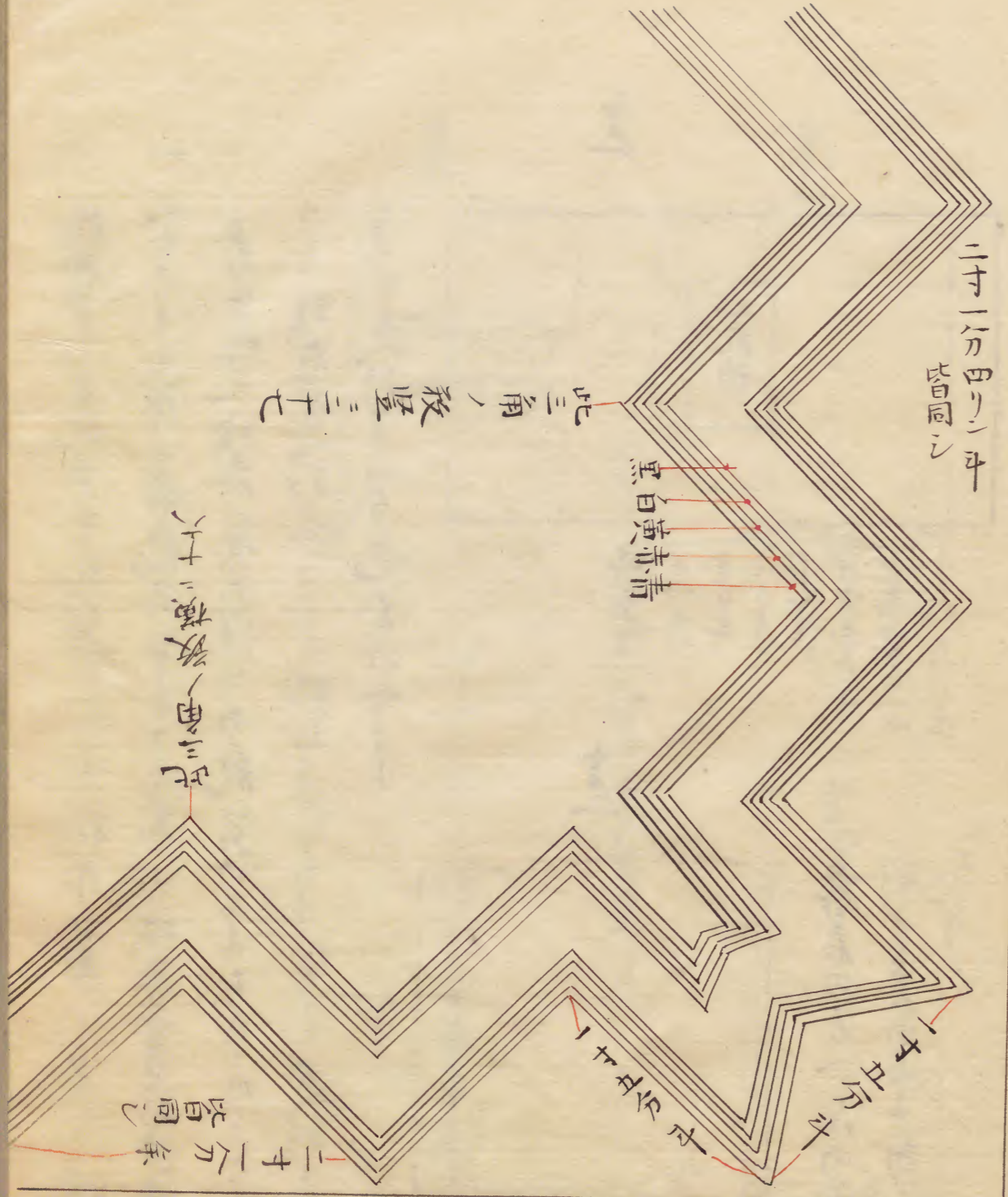


上サレ丑色の糸とる〜く〜とる
上サレ女色の糸とる〜く〜とる
女二幅〜とる

表裏
大目仕
る

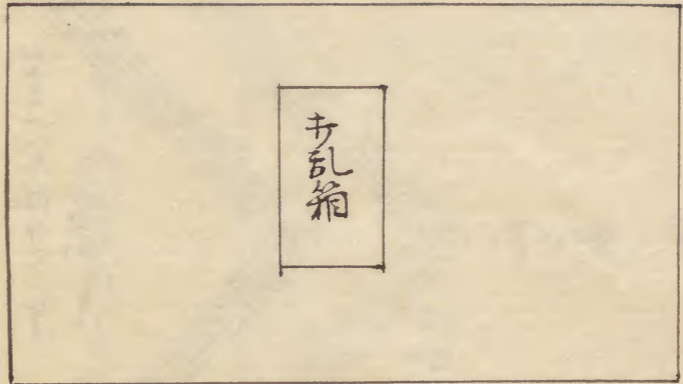
上ノのぬかよ〜とる

二寸二分四リニ斗
皆同じ



梯巾の上ノ
ササ色糸と並
二幅〜とる
何れもは一斗
とさ〜とる
とち表裏一
一通〜とる
うちこの〜
とる〜の
方〜とる
とち糸ハ〜
と〜
細糸を〜
と〜と
梯巾〜
細糸の〜

才一



柳中と
 才乱箱
 右の方の
 才乱箱
 中へ置く
 包む也

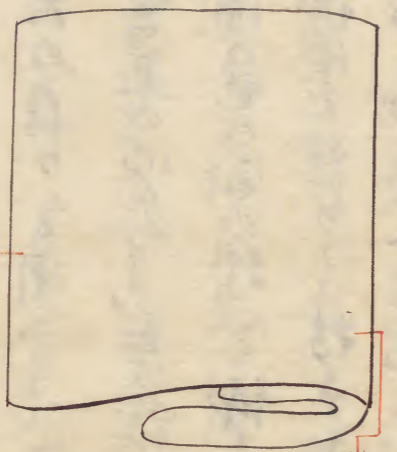
才二



右の方の
 才乱箱
 中へ置く
 包む也

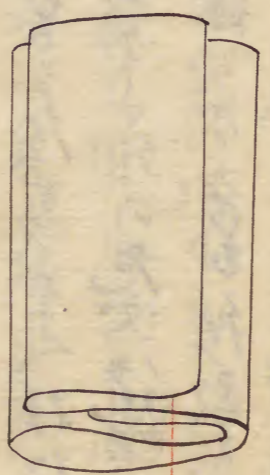
一 柳巾より才乱箱を包むるハ先柳巾の表と上より様よくひろ
 けくまをへんふ才乱箱をさして小く致く我たの方の端と才乱箱の上
 りせきせ又我たの方の端と才乱箱の上よりせきせくまのあま
 くと我たの方の端と相むりよのま——とともえおるけ我たの方
 をも上へおるる也要めゆ——

才三



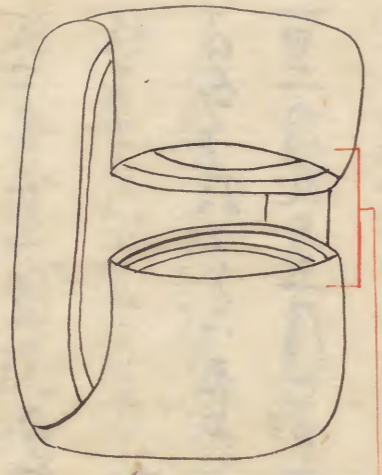
右の方の
 才乱箱
 中へ置く
 包む也

才四



上うえの
 才乱箱
 中へ置く
 包む也

才五



むらうかの
 才乱箱
 中へ置く
 包む也

右の方の
 才乱箱
 中へ置く
 包む也

一 男より才三歳の年女子ハ二歳のゆふらうのめをねた女も
 三歳うらうらうのめをねる

一 名曰と十月十五日の夜にうたつたまゝとありて一但昔鬼宿之余の
月より鬼宿あり鬼宿の口を用ゆ

一 兼て名口とありて定む一将軍ありて兼て陰陽師に依りて
在田吉方とありて一せしる陰陽師より幼文とありて勝其幼文の
紙よりせしる一幼文とありて田中の人書記一幼書とありて
のりありて一名口とありて鬼宿口と用ゆ一鬼宿口正月十
一日二月九日三月七日四月廿六日五月二日六月一日七月廿九日
廿九日九月廿九日十月十九日十一月十五日十二月十三日何れも
太の口を用ゆ一太名口也

一 警置の所と一玉の粉の事 利法 白髪を廣蓋より根松山橋を
浜口警置の粉と御子包入を女持ありて外の老女おれおおれおと
御中包ありて持より老女おれおの孫ありて是も飛ありて中絶して
終ておれおと小児を方より白玉能定りし付白髪の後おれおの後

衍字

ありて一玉の粉の事 利法 白髪を廣蓋より根松山橋を
浜口警置の粉と御子包入を女持ありて外の老女おれおおれおと
御中包ありて持より老女おれおの孫ありて是も飛ありて中絶して
終ておれおと小児を方より白玉能定りし付白髪の後おれおの後
よみありて一玉の粉と小児の頂よりおれおと扱白髪と一玉の
因介持より一玉の粉と一玉の粉と一玉の粉と一玉の粉と一玉の粉と
先女道より玉座の時おれおの老女おれおと持より老女おれおと
の老の後の方一玉の粉と御中の色をひきとりて一玉の粉と一玉の粉と
て白髪の方の髪をこききかく持と一玉の粉と一玉の粉と一玉の粉と
つけ在りしたの通りわしと持と一玉の粉と一玉の粉と一玉の粉と
一玉の粉と一玉の粉と一玉の粉と一玉の粉と一玉の粉と一玉の粉と
をのせしる廣蓋とひきき人におれおを御中より包入より
一玉の粉と一玉の粉と一玉の粉と一玉の粉と一玉の粉と一玉の粉と

勝休女一後天伊勢貞丈貞教女之原より征父勝尊より玉傳

紙に前之糸と進と回紙の御進とよけし既ち老女のみそく
の式を述べて別よしとぬ

一 男成の麻ととくく白髪をつくく用也一又女成ととくく
てとすりし他成の男女成ととくく髪をすりし又白髪を松葉
やふしよし一茶臼と髪をすりと髪をすりし顔よりくくると
古書よつんふふし
略儀のれといふ所ありしれは松葉やふし一茶
臼と髪をすりしを指す所ありしとくく

し一既ち他成の書とぬかしとくく髪よあけつ

一 山橋山菅 古の記録は髪物よ必山橋山菅と用りしとくく山橋ハヤブカウ
ジ也山スグハ大葉の麦門冬也ジヤウガヒケ トリウノヒゲ トモユナリハ系ガクとあり大系
なるものと大系なるを山すげ山魚らばなるを山すけとくく系書よ進て
と括込ぬ也髪物よ用りし松外用りし同し一〇和名抄ハ麥門冬 和名
夜未須介トアリ

一 髪玉の祝ハ系系とくくを飾りしとくく松山とくく花

の飾り枝と本の系織り包木のを包 木のを包 とくくの上玉 ゆひがま 紗
礼系よしん具と入道持物とくく小兜とを系へ向せとくくをよ
らせり櫛とありたのめん こくま たいのめん こくま しくく物を
しとくく櫛成納り返く相の祝ありし小兜とくくの祝なり
一 髪玉のものを生髪とくく系 とくく 末端よしん包 〇セイハツトヨ也

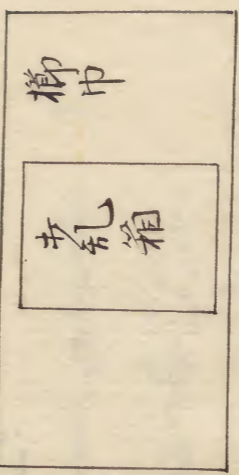
深曾岐

- 一 ふくさきとく男子ハ六ツの年 女ハ四ツの年 出するは是と云
るあひぬ髪を先をかきさし年あり
- 一 赤みぬるおふく一うういさみ 町合代一屋入屋一
- 一 足とまゝの家信夫婦をらひる縁をんさゆうのめくあま夫婦
髪をとりしうう髪おの時うう集りて一人のつしうの
勿偏なり

一 小児は髪をさす時を髪 夫婦 淨梳すくお男子のふくさきさる
婦さちみうる髪をく一ゆふ包に持集する時丈夫なると小児を左
方へ向せやくお乱髪をく一ゆふつみぬる持てううらう集る
赤みぬるおの内のさくをあらう一小児の髪人のく不の上の毛とか
さすみてつみみて持て居る時 川合の御と一ねとうたてよ

二ツ箱うてそねをばてよらあけ上りとわく一と扱わらけ
 こらのゆゑ髪をいせせく上りをわく夫後取てお札箱よ
 入く退たう婦に初うい見のたのちよ店也包紙を二ツあ
 ちらわ目の方ハりうえよたすり一

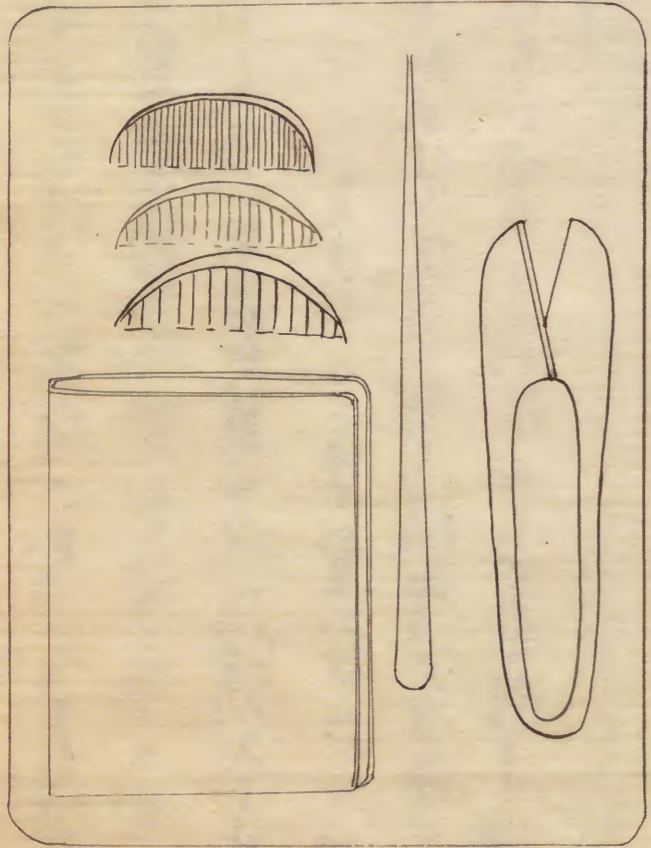
夫の髪は
 夫の髪は
 夫の髪は
 ○ 江戸



○ 江戸
 夫の髪は
 夫の髪は

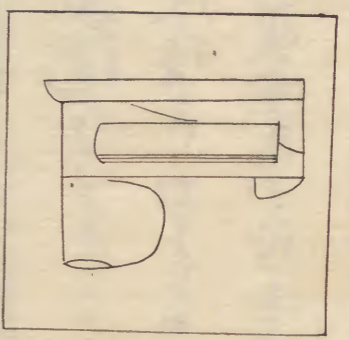
- 一 女子の髪はたのぬかかいらぬいぬい一うらう一夫の髪はゆきゆき
 すうらう婦の髪はゆきゆき夫つとむらうたのぬかかいらぬいぬい也
- 一 髪をみかむ髪の色は白くも赤くも髪の色は黒くも赤くも髪の色は白くも赤くも
 髪の色は白くも赤くも髪の色は黒くも赤くも髪の色は白くも赤くも
 髪の色は白くも赤くも髪の色は黒くも赤くも
- 一 髪の色は白くも赤くも髪の色は黒くも赤くも髪の色は白くも赤くも
 髪の色は白くも赤くも髪の色は黒くも赤くも

お札箱よ一
 并ともみり合
 油をいぬいぬ



〜

唐書より袖帯を
知る図



○ 男子の帯を夫 帯妙は唐
女子の帯を婦 帯妙は唐

一 帯をさしあつてはつたりとすべし 刺すは 漢より 帯をさしあつたり
たり上よと 帯をけきまらう 帯のむすぶをさしあつたり したれり

男子の帯をさしあつたりとすべし

勝体云 帯帯 漢風 有智

一 或書よ女子七色の時 付田をさしあつたり け帯とすべし 若し男子
の帯をさしあつたり

勝体云 け 祝 心得ぬる 古書よ 南 漢 南世と大概 女子七色の
一 女子ハ七色 追 へごの子 南 漢 男子ハ七色 追 へごの子 南 漢 追 へごの子 又
の帯をさしあつたり

いふべき所

一 日次記云建久八年正月朔日小兒五歳戴冠云云

一 いふべき所の祝と云ふありながら、専ら、其のいふべきは、

小兒五歳ありと正月吉日成てして冠と小兒の顔のよきこと

とせしむる官位^回にあらざる^{ハカク}年^{イサカ}幸^回しむる祝詞をいひ

て冠をいひ三友類^{ハカク}なるは親戚の礼を委^ニ桃華^ニ菜菜^ニ葉^ニ

後政^{ハカク}華^{ハカク}良^{ハカク}少^{ハカク}人^{ハカク}え^{ハカク}あ^{ハカク}り^{ハカク}世^{ハカク}業^{ハカク}日^{ハカク}紀^{ハカク}世^{ハカク}業^{ハカク}或^{ハカク}終^{ハカク}ん^{ハカク}四^{ハカク}多^{ハカク}り^{ハカク}水^{ハカク}を^{ハカク}わ^{ハカク}る^{ハカク}官^{ハカク}の^{ハカク}い^{ハカク}は^{ハカク}

さ^{ハカク}も^{ハカク}あ^{ハカク}の^{ハカク}め^{ハカク}し^{ハカク}止^{ハカク}り^{ハカク}ぬ^{ハカク}六^{ハカク}り^{ハカク}す^{ハカク}す^{ハカク}は^{ハカク}席^{ハカク}の^{ハカク}あ^{ハカク}せ^{ハカク}り^{ハカク}す^{ハカク}あり^{ハカク}す^{ハカク}は^{ハカク}六^{ハカク}帖^{ハカク}信^{ハカク}実^{ハカク}朝^{ハカク}臣^{ハカク}の^{ハカク}祝^{ハカク}也^{ハカク}

とありんば、五^{ハカク}日^{ハカク}あり^{ハカク}し^{ハカク}て、三月^{ハカク}新^{ハカク}六^{ハカク}帖^{ハカク}信^{ハカク}実^{ハカク}朝^{ハカク}臣^{ハカク}の^{ハカク}祝^{ハカク}也^{ハカク}

とありしを、これより近^{ハカク}り^{ハカク}あり^{ハカク}し、お^{ハカク}の^{ハカク}の^{ハカク}春^{ハカク}の^{ハカク}え^{ハカク}め^{ハカク}の^{ハカク}い^{ハカク}は^{ハカク}く^{ハカク}さ^{ハカク}は^{ハカク}は^{ハカク}く^{ハカク}あ^{ハカク}は^{ハカク}は^{ハカク}

夫木抄
とあり

一 古事終表六曰安藝守基明^{俊憲}、男子^{俊憲}、嬰子之時正月戴冠、同女

納言入道祝言云才學如祖文章如父
 一 權記云長保四年正月一日卯夕勅命之旨被申戴 饗事女者
 五歳男者 史原 歳以前之事也 三

男子袴着

一 水左記云兼保二年八月十六日今日東宮御着袴時三歳

一 玉葉云兼久二年十月廿日此日皇太子御着袴二歳

一 袴志云男子七ツの年すこ足と夫婦そろい子孫も人さりの人ひさすなり

一 祝の心況世あま出り小時の夫婦河禮終く扱さす何子袴と

袴半あてめさすこ 左足より先ふ少み入させし一はり田

斗めさす久にささき人あつ友上をい 畧さるこ是す何子の志を

こ大名をいの子息いさいん 長信ありをもめさすこは附より斗

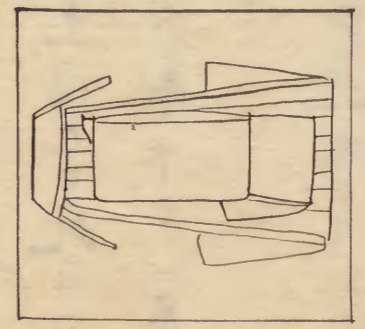
こを何ふいん 長信の上より是なり 是は附に用中より是元

服の時めし袴めさす所婦に未だは居る斗より正作は



- 一 袴の付並並らゆるんすあふの付いもう由斗えセーなり
- 一 袷の付並並らゆるんすあふの付いもう由斗えセーなり
- 一 足袋の付並並らゆるんすあふの付いもう由斗えセーなり
- 一 足袋の付並並らゆるんすあふの付いもう由斗えセーなり

女子の付並並らゆるんすあふの付いもう由斗えセーなり



男子の付並並らゆるんすあふの付いもう由斗えセーなり

- 一 袷儀の付並並らゆるんすあふの付いもう由斗えセーなり

目上の人なりは上斗えセーなり又時宜よりなりとせ

- 一 上斗えセーなりは上斗えセーなり又時宜よりなりとせ

ハセ儀を用ゆ

- 一 東渡三十四云今日若君御前魚味着袴

並令蒙魚味給申刻於寢殿有其儀云

女子袴の着

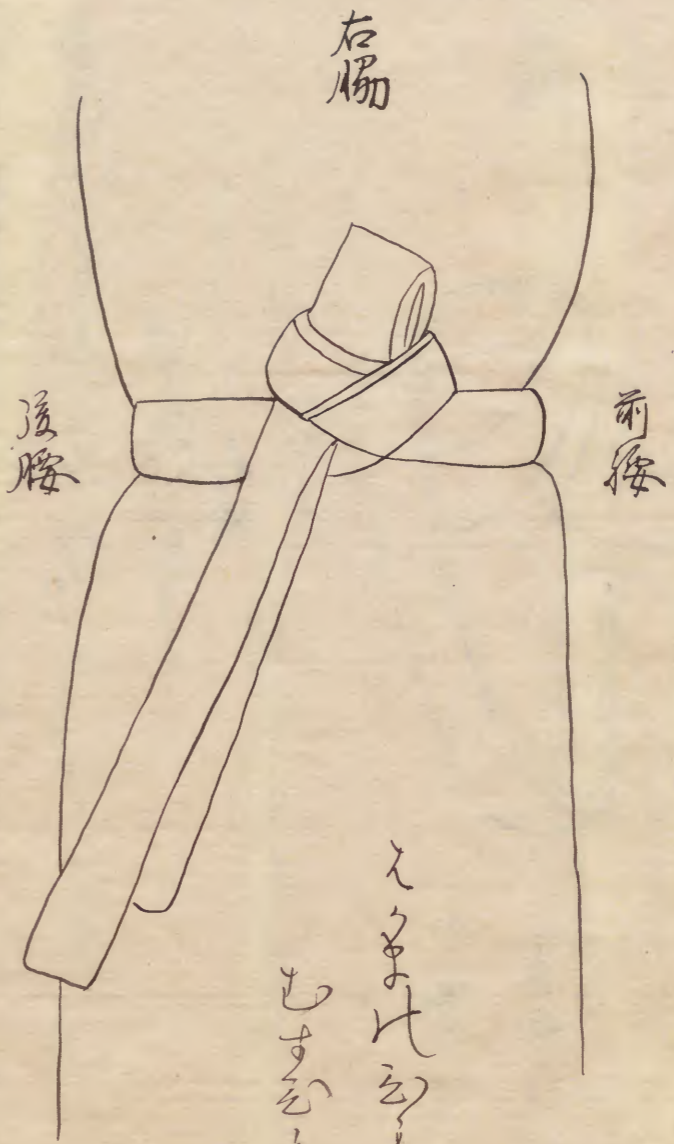
一 女子の袴は白の糸より作りし平人かたを——位よりきき衣の河目女
 ようきき衣の袴を好くききせしもの袴の袴を白の袴の袴
 地を程好より内裏上痛みの百袴なり
 一 是より前より——小児は衣より小児の時めを夫婦の袴に
 夫の袴をききしより袴の袴を好くききしより夫婦の袴をききし
 方よりしききしより夫婦の袴を好くききしより夫婦の袴をききし
 一 夫は衣は衣より袴の袴を好くききしより夫婦の袴をききし
 至の時めなり

小児は衣より袴の袴を好くききしより夫婦の袴をききし

女子の袴の着



たの國のわくくして三む進々景のわく成り



えうまけのしむすいある図

一 介ら女と七の年務志仰らり今と公家と女子の務志を
一 女の務り事古々を後より後より務り礼服をわが

かろくともまぶら事をもつて一さのりわ今を毎あとして
こねるりようわくことと上りのおきくある秋空は控達春
九も紙前の回教聖と云所は貧乏く物住りや女は親者多をけ
りひく富く身まかりし物住と云一たの事よくわねわめす一の
務を一あらをいれをそとせんといふとわね男の世きたる世に
一のを海とまわくけ女とよひをせと年ひさる人あらんよな
とさうはまよそひとわけぬわく一とさあひくもらわ
しうは事かく一は事の本ありすこれとまよはふはけく
とせんといひ志一とありては体とてすねなき足二更衣
の貧乏さむ昔母の先一はひり一ひ女のむよめの世を後く其
悦ひよ何の務をぬぎくたのむを先よあてよと事成てりて
よく何の務りや一と女やうくもてんはゆる事成ぬと

一 友経記 寛仁三年 九日丁卯 晚景 参大殿 左大将 御女 二人 於東臺有

着袴事大殿構改結腰云々上達部殿上人多被参會云々

皇女鉄臂附初並武士鉄臂附事

一 女九ツのこゝろに收養す是と況傳ふる事一 女と云ふ事女房
ふと云く一と名方申せし一 後時付せめし一 男と
元服後之様を付たり 男中 様と云ふ一 家々の佳例り
後々のこと云々

一 女の蓮花の事一 蓮花の事此等或は日記寛政七年
二月の条には^{晦日}蓮花の夜つし^{追離}蓮花の事と云ふ事
あるは^{一名世経}蓮花の事二年正月廿二日の条に馬と云ふ事又蓮花の
事と云ふ事^{物伝}蓮花の事と云ふ事^{蓮花}蓮花の事と云ふ事
又蓮花の事と云ふ事は^{蓮花}蓮花の事と云ふ事^假蓮花の事と云ふ事
みづくこと云々 寛政二年の年号云々
寛政二年 八月四十二年 蓮花の事

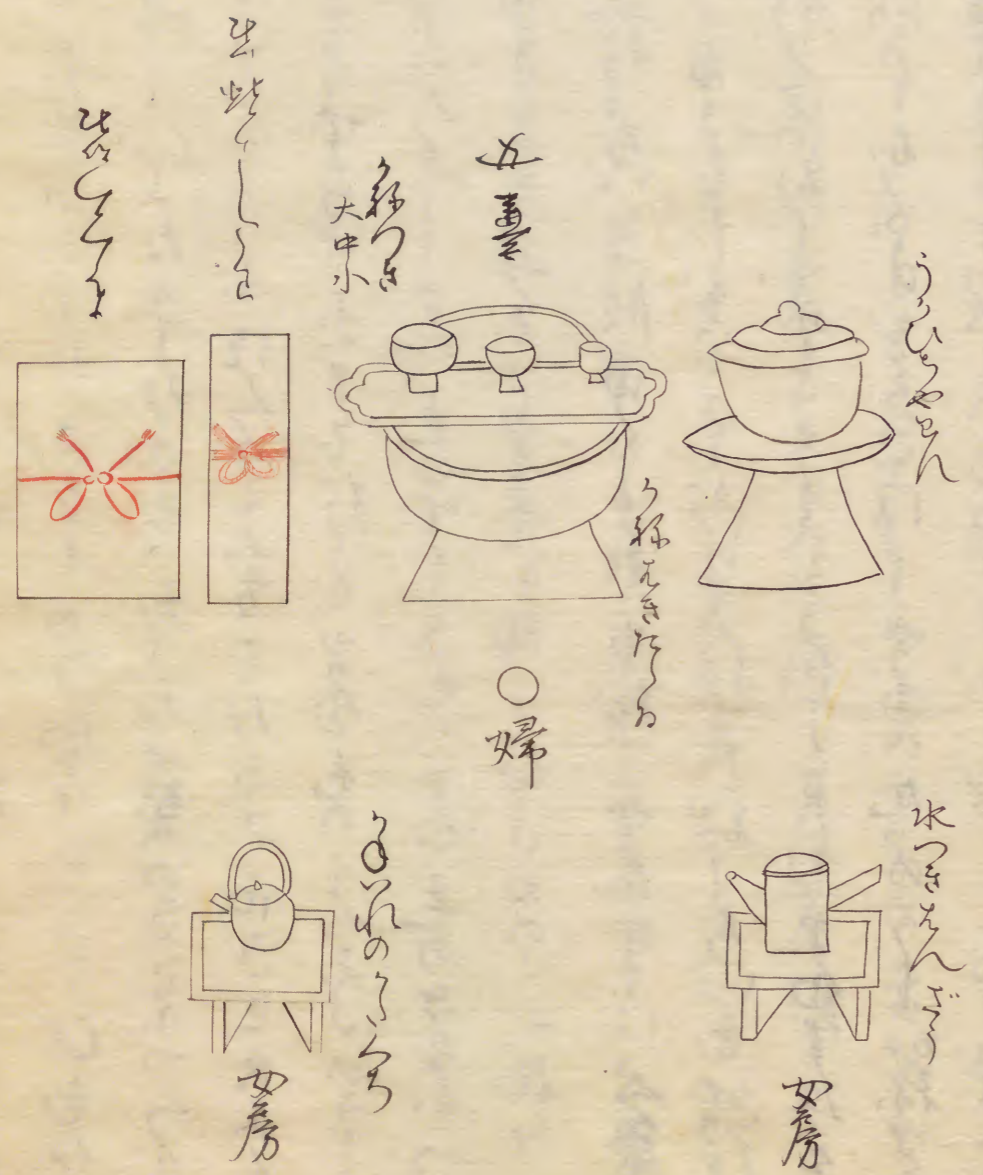
きぬますみくふし

一 儀式終り手懸或三献七小三礼あり彼の夫婦よりきぬますみくふしを御座候し門お仕立り夫婦より何れもきぬますみくふしを御座候玉のり

一 男みき袴を用ひらるる將軍家の娘君又ハ高位の大名の息女のみこ平太ハ不用之又細長をきぬますみくふしを御座候

一 初月初女子十三歳の時他人を斬り捨るるハ七新しききぬますみくふしを御座候ハ三喜揃しききぬますみくふしを御座候ハ又十二歳かへり後きぬますみくふし

一 既天或書名のぬますみくふしを御座候ハ又古書ハ七新しき



一
ほろちの事 不けんか... 次よりみき... 又次
向ききたる... すみききも 向きわも... ひぬをまら
つら... ひぬのすきき... 向きの髪... 向き...
すきき... 向き... 向き... 向き...
向き... 向き... 向き... 向き...
向き... 向き... 向き... 向き...
向き... 向き... 向き... 向き...
向き... 向き... 向き... 向き...
向き... 向き... 向き... 向き...

一
つし... の... 髪を... 髪... 髪... 髪...
髪... 髪... 髪... 髪... 髪... 髪...
髪... 髪... 髪... 髪... 髪... 髪...
髪... 髪... 髪... 髪... 髪... 髪...
髪... 髪... 髪... 髪... 髪... 髪...
髪... 髪... 髪... 髪... 髪... 髪...
髪... 髪... 髪... 髪... 髪... 髪...
髪... 髪... 髪... 髪... 髪... 髪...

ほろちの事

とひめ一頭あり



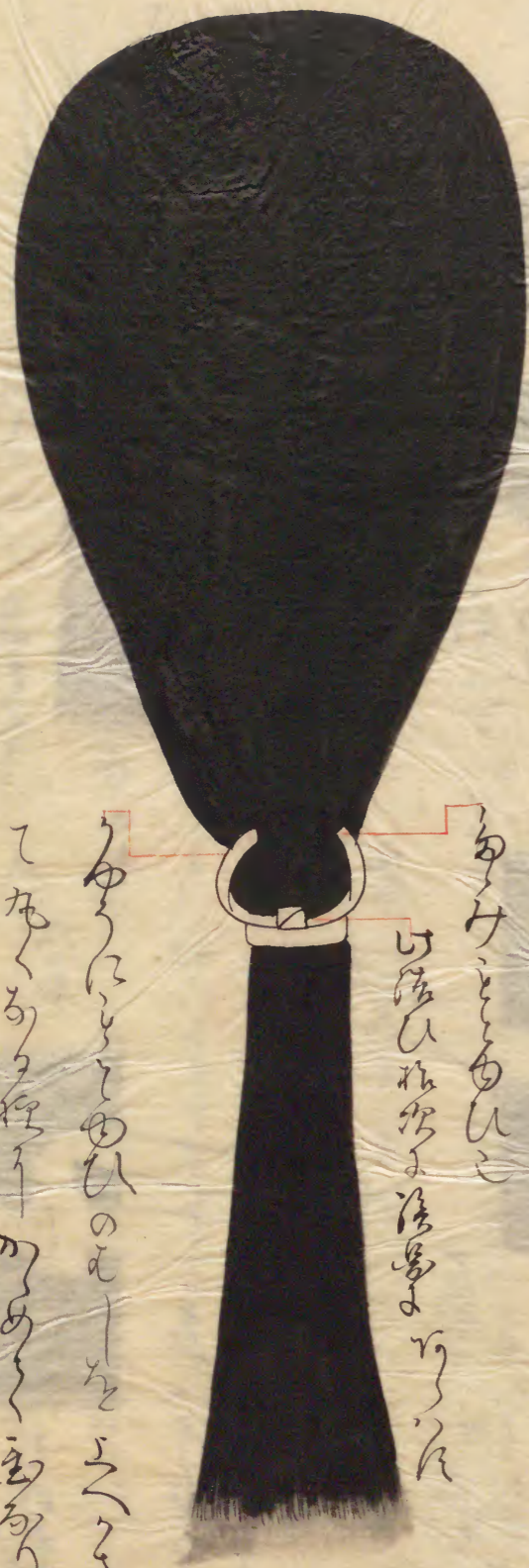
け眉毛のまわりをわゆる書ゆふ、白きにあり
 まゆかゝり、目まゆふ、すけきとあり、まゆかゝり
 かけまゆかゝり、ぬか、けまゆかゝり、まゆかゝり、書ま
 たり

白きとまゆかゝり、まゆかゝり、まゆかゝり
 一、まゆかゝり、まゆかゝり、まゆかゝり
 まゆかゝり、まゆかゝり、まゆかゝり
 まゆかゝり、まゆかゝり、まゆかゝり

まゆかゝり、まゆかゝり、まゆかゝり
 まゆかゝり、まゆかゝり、まゆかゝり

けまゆかゝり、まゆかゝり、まゆかゝり
 まゆかゝり、まゆかゝり、まゆかゝり
 まゆかゝり、まゆかゝり、まゆかゝり

とひめ一頭あり



けまゆかゝり、まゆかゝり、まゆかゝり
 まゆかゝり、まゆかゝり、まゆかゝり
 まゆかゝり、まゆかゝり、まゆかゝり

まゆかゝり、まゆかゝり、まゆかゝり

まゆかゝり、まゆかゝり、まゆかゝり

まゆかゝり、まゆかゝり、まゆかゝり
 まゆかゝり、まゆかゝり、まゆかゝり

多岐にてもひうけ紙

二枚を二重に巻く

えり紙



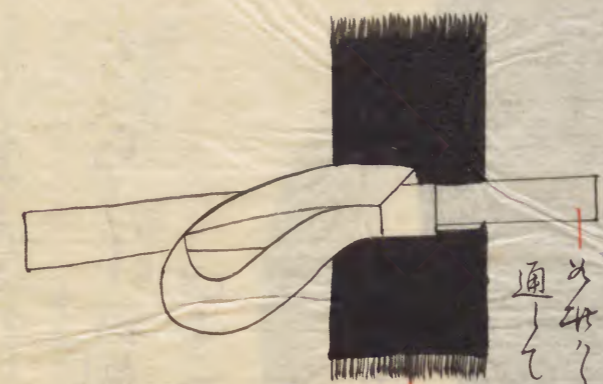
この毛

次紙

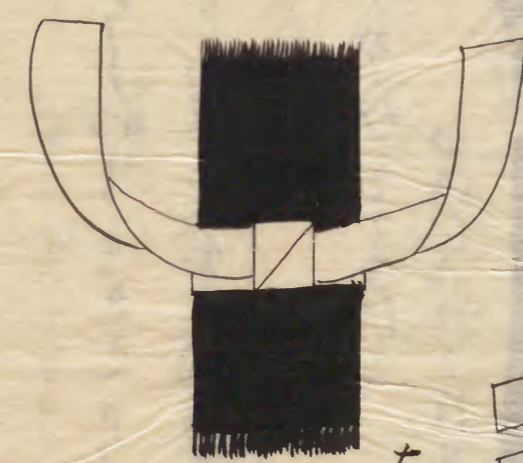
三枚の付はうと一尺の紙を
かたまたま成すかどに入さし
ておとすひたれぬ付はう

みねくみあつた
通しし引をむこ

次紙

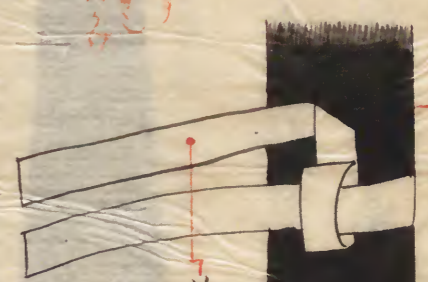


この毛



この毛

たのやく引をむね



この毛

みねくみあつた
引をむね

可なりぬをまねかき

一 童女の付はうに入進すおとあり成すかど一尺の紙を

とひたれぬの付はうをひうけ紙にひく

一 経つはうの個分の事をらぬ七尺八寸横八寸熱解を七寸

七寸のものを一寸三分山あり八寸のひうけ紙にひく

内へ今小道具二寸のひうけ紙をひく

一寸八寸半三寸八寸半横一寸八寸半をサ一寸一分半

を今又やうにひく

一寸一分半を二寸八寸半をひく

ひうけ紙にひく

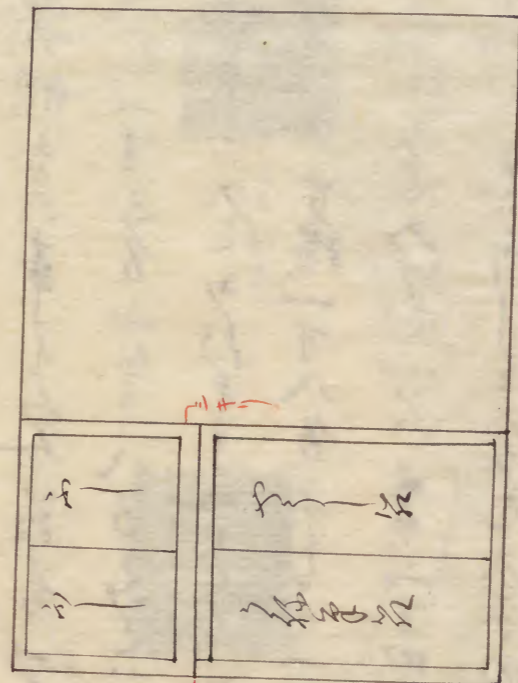
子のとまりの七寸八寸半をひく

九寸二寸半をひく

修是の法成す

師氏の修成す

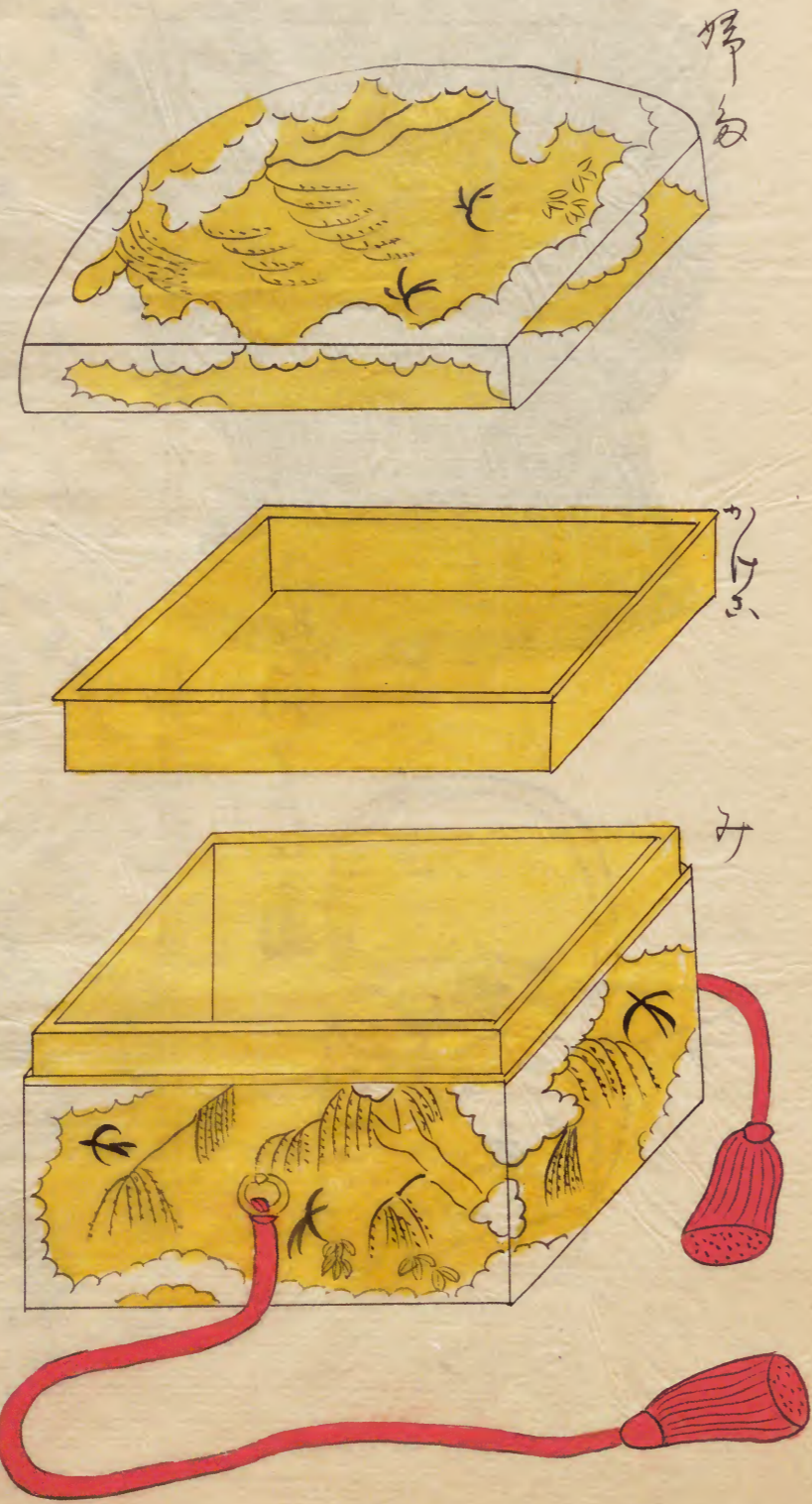
箱を合し行方ゆを口とすけいゆみ紙をのりこけこみく紙を
 大中小三つ外巻紙と三層なるに時用中ゆりこしゆも
 う一歳本し定り列一う紙を何れゆめゆ行に是も券つと紙
 定る一紙折しけいよのこしう紙ゆりゆめゆ行に金ゆりき
 大は法に其大際を云是より限りゆり事とさ



とらるとこの

ツヨなるよのやうな
 折たりツヨきをうら
 づかひす

ニキリトハ此間サツツギアリ
 クツロキナケレハ箱トリ出さ



一 紙をきとつ紙の四つみゆらいあまのやのゆこの
 ひとんまもあくおもくゆりゆらゆら箱後ち何そとすのさう
 人のゆりあたり
 徑九寸ハカリ
 ニテヨシ

一 弓の事には紙をきたりゆりゆらす物にゆの上より紙を

ニッおく大申少みニッ入なをふる物に大あをの糸入くたよちく申
よふを今て申よあく少み氷をのくたよち也
一 子う一金の長一尺二寸五分横二寸五分方よりく



子う一金の長一尺二寸五分横二寸五分方よりく

子う一金の長一尺二寸五分横二寸五分方よりく



子う一金の長一尺二寸五分横二寸五分方よりく



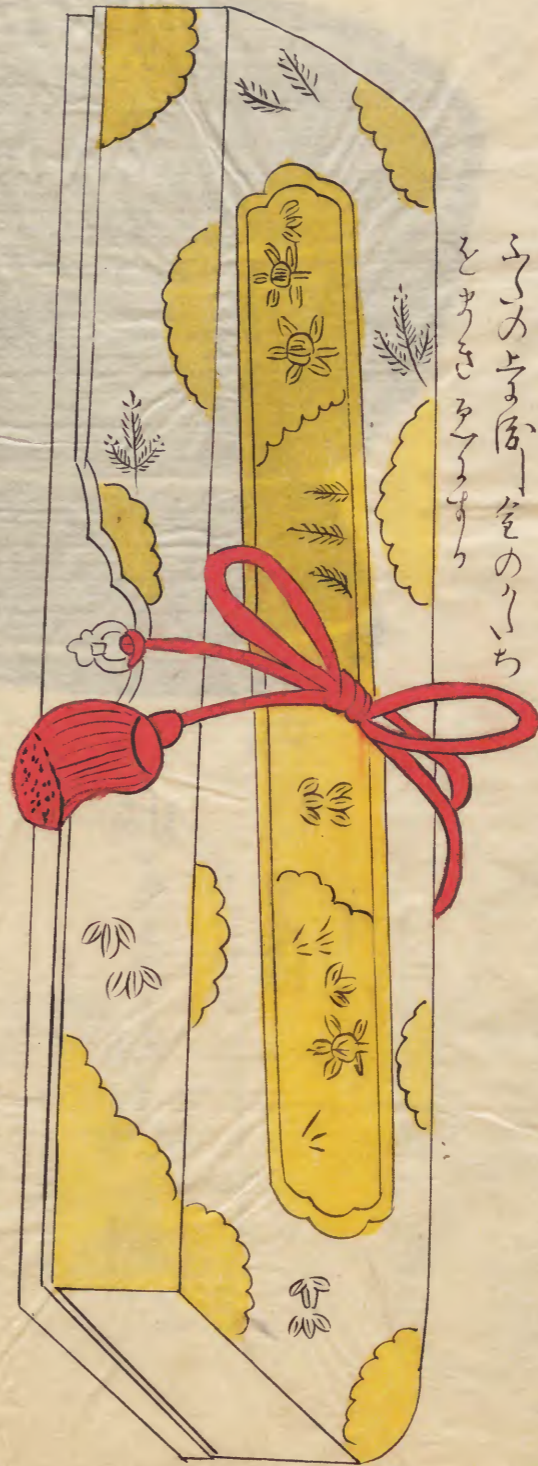
子う一金の長一尺二寸五分横二寸五分方よりく

一 子う一金の長一尺二寸五分横二寸五分方よりく
子う一金の長一尺二寸五分横二寸五分方よりく
子う一金の長一尺二寸五分横二寸五分方よりく
子う一金の長一尺二寸五分横二寸五分方よりく
子う一金の長一尺二寸五分横二寸五分方よりく

一 杯をねねのふりこきたーかぬのすたは定法を
 入ーけらけいよこーうくそよきこまーねまのまみ
 入ー一 振舞はとらー一 何とせよぬー

一 杯のねねの図

ふりこきたー金のくち
 をさきまふり



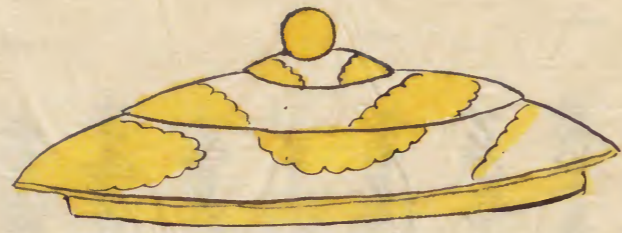
一 うい系碗と本碗又ハ銀在焼物の類こちる何ハ本碗ハ一ち所
 陰意ぬり筋縁ホこも危こと同分うい系碗ふりこきたー一對こ

ふり

うい系碗

図意

なつり



一 汗衫之品 并初をふりの品中を祝之書 伊勢登 少何ハ足合す
 貞效作

ア

一 九ツのものをつけ初アハ祝の何れ定分ハ心身より之ハ
 時々の程を振て大昔の法をたねの後に法成り何れ

一 貞丈翁のそひひいあそろし前条分付しと寛永云んが
のころ貞衡翁の時代

勝徳云貞衡ト伊勢吉原貞翁の子伊勢吉原貞衡也寛永
六年四月廿八日彼 貞出吉原吉原ト母若道同盛四城
三序和泉守章妻女春日御局妹

一 古武士と公家のゆく浮遊を舟く遊を悪くとらるるそひいあそろし
遊と足先より人の収を舟ぬか指務ししと貞衡云右の侍ハ遊と遊を
悪くとらるるゆへ白遊は是上下のともしとそひいあそろし
ゆへ

一 東鑑卷五十五金より是く録とゆへと 聖徳記卷廿二入道申夜
符条云 共計十三トあそろしきく舟付け多し小男の生僧の生出よし終
まそゆへしと入道前よりとゆへとそひいあそろし
浮遊と遊とゆへは表し元ハ解毒のゆへしゆへん本州細国より

解毒の事云えぬり

一 武士遊と思ひたるゆへ海人薩芥よ云 鳥羽院の時代以前男眉の毛
をゆき髪とほみ金を付たるゆへ一切そひいあそろし及妻代母を驕飾のゆへ

そひいあそろしのゆへとそひいあそろし
仁公 後三条院の御孫也又ハ輔仁親王 殊ゆへ云文を好み多し鳥帽子を
仁公 後三条院の御孫也又ハ輔仁親王

有仁公花着風流を好み多しゆへ遊ハ眉代ゆへ髪をとそひいあそろし
ゆへと遊を遊の白遊とゆへ紅遊を舟く舟のゆへとゆへ
有仁公の語られしと遊ハ装束の云文とと舟の時代より好む海
人薩芥よとゆへ舟同遊ハ先平治以前の合戦よとゆへゆへ
大ね右の風俗ありしと武士よと風流と家臣の武士と
遊のゆへとゆへ 有仁公とゆへ 原平盛衰記平家物語
忠臣の最後ゆへとゆへ 舟同遊ハ先平治以前の合戦よとゆへゆへ

氏の多士^トがた方のこ^トけり^トに^トく^トて^トる^ト初^トこ^トを^ト在^ト公^トの^ト武^ト士^トに^ト收^ト
 けり^ト系^トの^ト人^トの^トこ^トの^トけり^トつ^トる^トを^ト知^トり^トし^ト小^ト系^ト五^ト代^ト記^トの^ト小^ト田^ト系^トに^ト
 と^トて^ト皆^ト人^トを^トさ^トぐ^トり^トた^トの^ト記^トさ^トる^トた^トは^ト二^ト君^トは^トは^トと^ト思^ト色^トを^トあ^トせ^トる^ト
 けり^トし^ト後^ト坊^トと^トす^トく^トそ^トく^ト侍^トも^ト人^トの^ト先^ト着^ト共^トは^ト連^ト正^トを^トと^トり^トし^トぬ^ト
 えり^トし^ト是^トも^ト由^ト田^ト系^トの^ト北^ト系^ト氏^ト茂^トに^ト 甲斐入道ト
トリスえり^ト系^ト政^ト将^ト軍^トの^ト政^ト刑^ト
 職^ト印^ト新^ト奉^ト行^ト伊^ト勢^ト伊^ト勢^ト守^ト平^ト貞^ト四^ト 平藏貞四の
トリスの^ト三^ト男^トと^トく^ト伊^ト勢^ト伊^ト勢^ト
 貞^ト貞^トと^トく^ト人^トの^ト元^ト八^ト系^トの^ト人^トあり^トぬ^ト在^ト國^トと^トも^ト系^トの^ト風^ト俗^トを^ト改^トめ^ト
 ず^ト連^トと^ト思^トえ^トり^トれ^トし^ト及^トび^ト一^ト家^ト中^トの^ト侍^ト皆^トう^トけ^トり^トし^ト元^ト承^ト六^ト家^ト
 り^トく^トし^ト縁^トが^ト初^トれ^トし^トは^ト好^ト色^トの^ト風^ト俗^トより^ト起^トる^トもの^トあり^トと^ト云^トふ^トに^ト
 う^ト縁^トが^ト後^ト徳^ト儀^トの^トゆ^トへ^ト得^トく^ト先^ト武^ト志^トの^トあり^トと^ト云^トふ^トに^トけ^トり^トし^トは^ト
 り^ト後^トの^トゆ^トへ^ト得^トく^トる^ト志^ト儀^トと^ト今^ト世^トは^トと^ト云^トふ^トに^ト公^ト家^トは^トう^ト縁^トを^ト
 け^トり^トし^トる^トを^トう^トけ^トり^トし^ト今^トの^ト氏^ト士^トの^トけ^トり^トし^トる^トを^ト一^ト足^トを^トう^トけ^トり^トし^ト
 古^トの^ト風^トを^トと^トり^トし^トけ^トり^ト

- 一 蓮系^トの^ト祝^ト文^ト明^ト五^ト年^ト十^ト月^ト晦^ト日^ト若^ト君^ト様^ト破^ト儀^ト祈^ト蓮^ト正^ト市^ト祝^ト文^トに^トて^トは^ト蓮^ト系^トの^ト祝^ト儀^トあり^ト元^ト辰^トの^ト祝^ト儀^トあり^ト其^ト日^ト連^ト正^トの^ト縁^トを^トと^トり^トし^トて^ト蓮^ト系^トの^ト祝^ト儀^トあり^ト一^ト日^トを^トと^トり^トし^トて^ト祝^トあり^トと^ト云^トふ^トに^ト一^ト
- 一 宣^ト胤^ト郷^ト元^ト明^ト十^ト三^ト年^ト四^ト月^ト八^ト日^ト公^ト卿^ト近^ト口^ト義^ト陽^ト大^ト樹^ト令^ト名^ト村^ト鳥^ト帽^ト子^ト
 給^ト被^ト置^ト眉^ト毛^ト之^ト鳥^ト帽^ト子^ト一^ト向^ト不^ト可^ト有^ト也^ト用^ト之^ト仍^ト義^ト政^ト准^ト后^ト所^ト等^ト
 江^ト師^ト系^ト以^ト外^トの^トけり^ト
- 一 高^ト明^ト院^トの^トけり^ト朝廷^トの^ト作法^トの^ト政^ト事^トも^ト此^トあり^ト平^ト家^トの^ト公^ト達^ト皆^ト家^ト
 の^ト人^トなり^トと^ト云^トふ^トに^トけ^トり^トし^トる^トは^ト冒^ト作^トり^トぬ^トつ^トけ^トり^トせ^トれ^トなり^ト

下帯之祝

一 今時世は幼年の人嫁にたゞききをしんがりのあはれをり帯
の祝も各月々之節にちやのめくちあひのちやと名付く共
人よりたゞききを甚ましくきこへ祝ふるあつしき
音々あきよしあまりし世の風俗あらうよあつしき
の祝もすするのあつしき

一 幼んがの事古にたづなり又もこの世に又下帯し又たき
きよしの事と一つ物に是節一幅をいづく前後をわたり物に義貞の
記を義家朝臣の遺書用之文字を記されしよ事よふ事とあふ
是こ又若我物信書しよ事よふ事とあふかけあきあつしき
くあつしきよ事とあふしよ事とあふ平左をいづく事とあふ
よ事とあふしよ事とあふしよ事とあふしよ事とあふしよ
事とあふしよ事とあふしよ事とあふしよ事とあふしよ

と用也——近江の赤白を拜也(と) 禪又太布佐岐湯奥女子のハ
再今年備湯奥と云々又孝七女と云々と云々と云々と云々と云々と
儀初と云々云々 勝体云々の儀の云々云々云々云々云々云々云々
云々と云々云々—— ありありありありありありありありありあり

一 安世云今世童子の巾着の儀と云々其親類の方より 紅白の
巾着をたよと云々送るものあり巾着の儀は人のあまそ 其名を云
ふと輝ある物に 衣巾着の儀と云々の事と云々人あり云々と云々と
に世の風俗ありと云々と云々と云々と云々と云々と云々と云々と云々と
云々と云々と云々と云々と云々と云々と云々と云々と云々と云々と云々と
と云々と云々と云々と云々と云々と云々と云々と云々と云々と云々と云々と

鑑書初

一 男子初々 漢名云々名を云々し 儀儀云々—— 武田名云々人を
頼み々 漢名云々—— 夫人漢名云々—— 此の武田云々
云々と云々と云々と云々と云々と云々と云々と云々と云々と云々と云々と

一 漢名初々 名ハ 儀儀云々利云々氏名云々を云々云々云々云々
儀儀云々子の年云々云々子の方云々云々云々云々云々云々云々云々云々

一 鑑ハ 儀儀云々の方 儀儀云々の方 儀儀云々の方 儀儀云々の方 儀儀云々の方
儀儀云々の方 儀儀云々の方 儀儀云々の方 儀儀云々の方 儀儀云々の方 儀儀云々の方

一 甲胃の前云々 正月の儀の如く 儀を云々と云々と云々と云々と云々と云々と
儀を云々と云々と云々と云々と云々と云々と云々と云々と云々と云々と云々と

一 瓶子一具口を蝶形と云々と云々と云々と云々と云々と云々と云々と云々と
云々と云々と云々と云々と云々と云々と云々と云々と云々と云々と云々と云々と

五と貳同利の如く一五ハ三ツからつけに在るは沈子と云ふは
蜂形の色也

- 一 五能く沈子澄るる人の東向は澄る也一は所は南に向
- 一 一又氏神の方又至女の方又陣神の方と云ふ
- 一 澄るるの明後見の人二人と云ふ一澄るの一人と云ふ
- 一 澄るるの沈子

才一 小徳

小徳の如く

才二 少神

少神の如く
少神の如く
少神の如く

才三 巾の帯

才四 腰巾

才五 五と春

才六 五と

才七 小手

少神の如く
少神の如く

才八 五と

才九 五と

才十 袴

才十一 五と

才十二 五と

才十三 五と

才十四 五と

才十五 五と

才十六 五と

才十七 五と

才十八 五と

才十九 五と

才二十 五と

五と

五と
五と
五と

五と

五と

五と

中世一 太刀在 弦袋

中世二 証失

中世三 石う南

中世四 弓

中世五 弓

龍を肩より後の上帯を流す
うらみちを別よはり
次うらみちをくけり

一 母屋を懸てさうへに証失を肩より後懸て一扇を流す
さうへに又三高紐の結付とさうへに一鞆の馬よりさうへに後膝置の
さうへのつがく横多くさうへに一鞆の馬よりさうへに後膝置の
の爲に又一扇の糸の腰よりさうへに足をはき
しよ

一 義貞記 證 忌用 次牙

一者 浴衣

二者 少袴

生活練貫

二者 大口

四者 髪亂

五者 袴卷

六者 弓敷

七者 澄直金

八者 脛巾

九者 括り

十者 髓角

十一者 頬貫

十二者 服立

十三者 手蓋

十四者 澄

十五者 刀

鞋好

極楽

白布八尺三寸

- 十六番 太刀
- 十七番 証失
- 十八番 弓

一 是を八幡を奉り義家の被さるる次子と云ふ。自又云此後其用次
 子體原抄に載る所の義家の志用次子と云遠之可信也
 源表との久陽具の體原抄より云々細とある同一信より云
 フト也生後ハスツコ給に傳費ハ今世云コソラノニメト云者也
 大口ハ大口の袴に袴好に袴好の大口に縁塗列を烏帽子の縁
 を滑り塗るよりこら惣ハモロユカケ一具カケ勝体云カケハ有る又品は有 涯連定と云
 袴と具とるに腰巾ハハハキコ今云キヤんに括るハ志定の両袖に
 因縁の白紐を括り縮ラシメ括り是を四括ると云 願貫ハ毛密
 己手蓋ハ巾より刀幅刀之鞘表に長サ七八寸斗の深サに
 今世首圍キ通通なりと云願に証失ハ簾より盛るるを云なり

此の身の申り 膝漣佩ニナト云は是を其代に物なるるを名
 好すし胃の裏より申すは足見足ハ大将軍より御方ハ胃をハ
 申すは役人の志を或は括るる出るる胃の事 不見也

一 當世具是志用之次子

- 一番 糖袴
- 二番 志親
- 三番 腰巾
- 四番 服指
- 五番 腰巻
- 六番 上帯
- 七番 籠子 玉袖
- 八番 太刀
- 九番 願貫

下振巻 裾下と云

十番 曹

十番 母衣 花指物

- 一 右に伊予の如くまきし一 浪走の人よりすまきし可ぬまに
- 一 自史云浪走の腰巻又ハウサリナトヲ着ルハ人の器量より一 雅と定くまきしよりまわらぬ
- 一 浪走用の伊予伝統あれども 次身札ありしを或ハハ真尺のとれぬるとなり用ひし一 太の法を用し太の伊予をひくた 志あわぶ水浪難一 七忌用は際よりゆき浪を平とやくまきしより母衣の一あり
- 一 浪走も中ハ 麻札もとも 唐櫃もとも 腰をまきせ 南に向 一 張らとら秋まつき 証失を指持左の足あし 揚子をまき ぶせしと 相腰をうけまきし 或ハ証失を指せず 圓扇を指 するといふ一 相出陣の者但を高き物あしとく 下より三献の

浪走一 一 浪走より相はる一 出陣の時と 相伴りまきあこ 三つ めの意を浪親へ一 浪親をまき 物まき 酌のは候 出陣の時 の ぬ一 酌陪候の人 浪をまき一 七勤怠一

- 一 太の浪候お側く浪をぬる浪走急急一 斗志を隔るハ其 候多し一 一 座の各ハ 浪をまき 祝一 一 引候ハ 序候の時 酌 候し者も 浪親を 浪走をまき

- 一 酒肴御供候の三つ 意を浪親へまき 浪走のありしすす 二 三 呑所ハ 浪親の方より 太力も 其外何をも 其奥をまき 又如く三献をまき 浪親へまき 相共 意を 浪見の人 雅とまき 浪走も 其意一 のりよまき一 ぬくまき

- 一 二 三 めの意をまき 吾を 浪親へまき 其意を子の父へまき 父 吾を 浪見の人 上雅とまき 別吾御と 浪見の人 太力 折紙おし一 浪走を可申あり

一 右の儀終り共蔵の賜物と屋間を飾りて家のお位侍
大將物次以下位の番中も極く序を正し帰儀の番位
ありて三献進むなり

一 父子の方より後親年 後見の人を引出せり

寛政五年癸丑五月七日伊勢貞春除奉命 山邊正思述前
之式

一 山邊正初の事先 陰陽の預り作り勤文をなすにめ
在日左附を撰り山邊いり

一 南日主殿の杯は板より酒 至鳥二進折 瓶子びんを
あらし一是は軍神へ通せり

軍神へのみ記しぬも軍神年氏神へ通せり

一 主殿の主居の方へ兼く甲冑より箭太刀刀以下の武具を
簡たらし

一 御門角又御家居の内より武切の者より人を引撰り
御座親し定らし一人其人の座をめさせや也

一 御座親の前より水牛より其儀より御元
後へ後より其儀より先へ先へ御座親へ通せり

一 互座へ御入りて先御座親ありて 御座親を御座
對面より懸式三献より其儀より御座親より御座

武具の内より物を進上せり右の御座親より御
座親へ御の御座親より其儀より御座親より御座

一 勤文の時刻より成りて又主殿へ御座親を初御座
御座はの人より御座親より御座親より御座

一 御座親の人御座親共外の武具より御座親の蓋より御座
御座親の御座親より御座親より御座

一 御座親御座親の御座親より御座親より御座親より御座

澄祝のたのきかーりくく店へいぬやうく行まじく行装
来をよわ統んま時右の房よりよのせくくさうりなきいん

一 河雲来を脱後くせしむ南の方へ向せし南の方屋ありま三ツ目
お林の方と用へし

まをり又河原の人屋へりさうりさうり河原のついでに
河原のついでに

河原次郎並出の上をまかせ次郎並出のりをまかせ勝体云並出
とえり

たのきより入つたあはれをたのきより入つたあはれを
入つたあはれを

つゆゆきとさうりさうり河原へけをさうりさうり河原へけをさうり

せり河原へけをさうりさうり河原へけをさうり河原へけをさうり

河原へけをさうりさうり河原へけをさうり河原へけをさうり

河原へけをさうりさうり河原へけをさうり河原へけをさうり

河原へけをさうりさうり河原へけをさうり河原へけをさうり

河原へけをさうりさうり河原へけをさうり河原へけをさうり

河原へけをさうりさうり河原へけをさうり河原へけをさうり

河原へけをさうりさうり河原へけをさうり河原へけをさうり

河原へけをさうりさうり河原へけをさうり河原へけをさうり

河原へけをさうりさうり河原へけをさうり河原へけをさうり

河原へけをさうりさうり河原へけをさうり河原へけをさうり

河原へけをさうりさうり河原へけをさうり河原へけをさうり

河原へけをさうりさうり河原へけをさうり河原へけをさうり

河原へけをさうりさうり河原へけをさうり河原へけをさうり

河原へけをさうりさうり河原へけをさうり河原へけをさうり

河原へけをさうりさうり河原へけをさうり河原へけをさうり

河原へけをさうりさうり河原へけをさうり河原へけをさうり

河原へけをさうりさうり河原へけをさうり河原へけをさうり

河原へけをさうりさうり河原へけをさうり河原へけをさうり

河原へけをさうりさうり河原へけをさうり河原へけをさうり

河原へけをさうりさうり河原へけをさうり河原へけをさうり

河原へけをさうりさうり河原へけをさうり河原へけをさうり

河原へけをさうりさうり河原へけをさうり河原へけをさうり

河原へけをさうりさうり河原へけをさうり河原へけをさうり

一 山邊親所一門あり河邊親より門ありしや河前
より河前時武具の内河より進上すこと共並き
りし河前又河前より河前より河前より河前
親より河前より河前より河前より河前より河前
河前親より河前より河前より河前より河前より

一 河邊親の所ありし河邊親より河前より河前
より河前より河前より河前より河前より河前
より河前より河前より河前より河前より河前

一 河邊親より河前より河前より河前より河前
より河前より河前より河前より河前より河前
より河前より河前より河前より河前より河前

一 山邊親の所ありし河邊親より河前より河前
より河前より河前より河前より河前より河前
より河前より河前より河前より河前より河前

一 河邊親より河前より河前より河前より河前
より河前より河前より河前より河前より河前
より河前より河前より河前より河前より河前

一 文治四年七月十日若君^{万壽君七歳}始令着御冒之給^面於南殿有真
儀時刻二品出御江間殿参進上御簾給次若公立御武藏守
義信胤^{比企}四郎義負^{胤母}奉持扶之小時小山兵衛尉朝政
持参御甲直垂^{請地}政以前御装束朝政奉結御腰次千葉
介常胤持参御甲納櫃子息胤正師常昇之前行胤頼扶持
又從後常胤御甲向南令立給此間梶原源太左衛門尉景季
進御劔三浦十郎義連進御劔下河辺庄司行平持参御弓

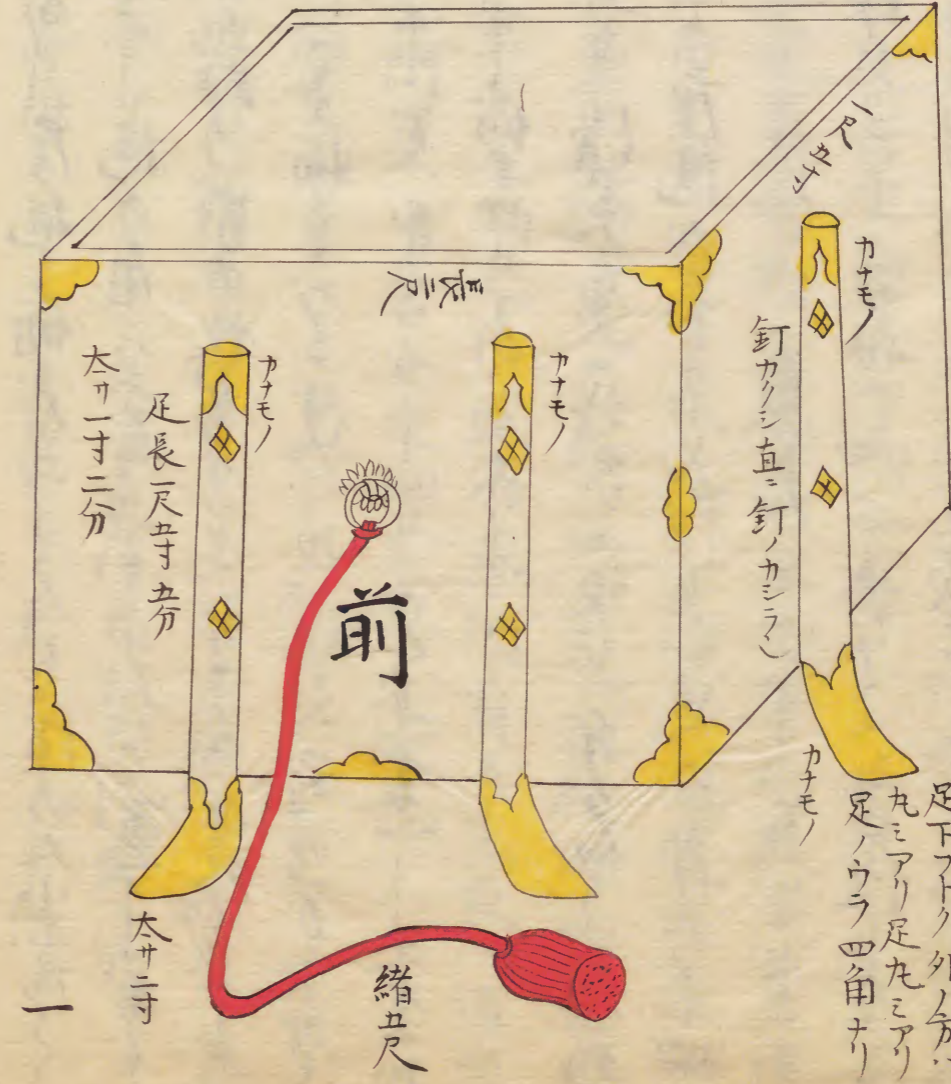
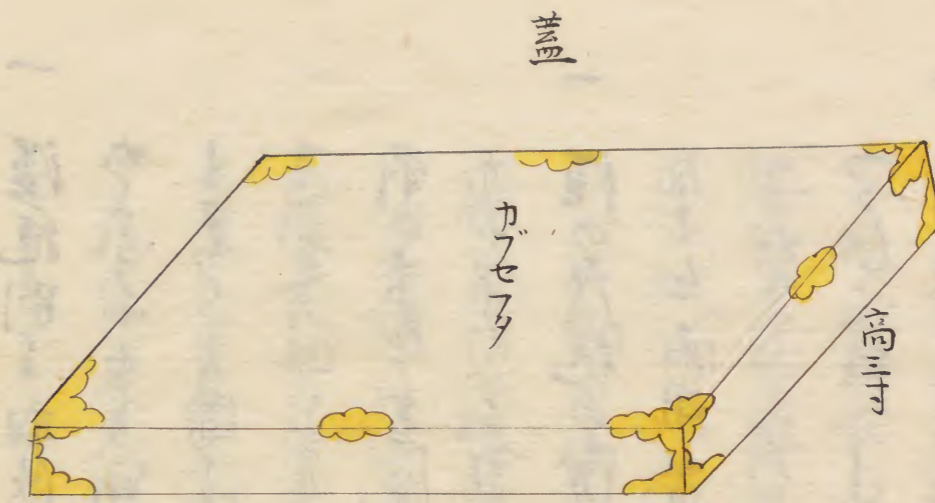
佐々木三郎盛綱献御征矢八田右衛門尉知家献御馬置黒
 子息朝重引之三浦介義澄畠山二郎重忠和田太郎義盛
 等奉杖乘小山七郎朝光葛西二郎清重附警小笠原彌四郎
 等候御馬左右三度打廻南庭下御今度且立右馬允遠光奉
 把之甲已下解脫親家御物具御馬入御厩納殿等其後
 武及献御馬於二品里見冠者義成引之次於西待有盃酌
 二品出御于釣殿西面上母屋御簾武及所經營也初献御酌朝光
 二献義村三献清重也入御之後武及奉酒肴生衣一領同
 小袖五領於御基所賀申若公之御吉事之故也

一 左儀の式因か 列下侍書より、及令一秘事なり
 今儀休其大振を、又男子盛志初に河蔵（次）
 ろり事より、今討三十二歳位より、まろり中侍

一 澄櫃別、或は向、度櫃より細多うすく、澄の大小ゆらぐ
 大よきふくもゆらぐ、櫃の角ハ、さうやう、ゆらぐを、ふく、
 も、まろり、まろり、ぬり家の紋、ゆるり、ゆるり、ゆるり、ゆるり、
 一、是のよりゆらぐ、さうゆらぐを、ゆるり、ゆるり、ゆるり、ゆるり、
 前のものを、金泥、まろり、まろり、ゆるり、ゆるり、ゆるり、ゆるり、
 り、ゆるり、ゆるり、ゆるり、ゆるり、ゆるり、ゆるり、ゆるり、

一 澄の度櫃の度、の度、澄、黄布、これ家の紋、を、ゆるり、ゆるり、
 ゆるり、ゆるり、ゆるり、ゆるり、ゆるり、ゆるり、ゆるり、ゆるり、
 ゆるり、ゆるり、ゆるり、ゆるり、ゆるり、ゆるり、ゆるり、ゆるり、
 ゆるり、ゆるり、ゆるり、ゆるり、ゆるり、ゆるり、ゆるり、ゆるり、
 一 扇、澄、ゆるり、澄、櫃、の、ゆるり、ゆるり、ゆるり、ゆるり、ゆるり、
 を、ゆるり、二幅、割、幅、ゆるり、ゆるり、ゆるり、ゆるり、ゆるり、

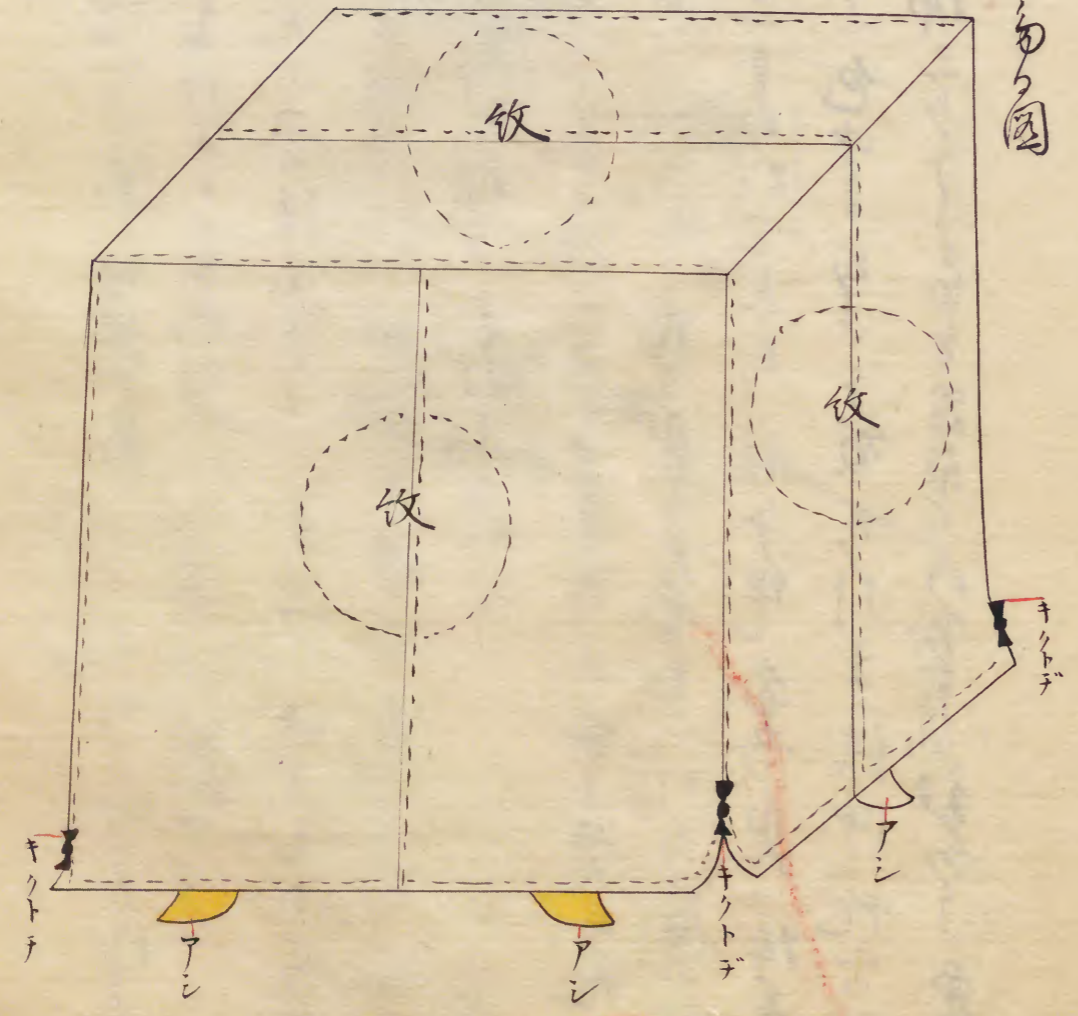
唐櫃之図



此足ノ木ノロニテフタノフチヲウケル

足下アトク外ノ方ニ丸ミアリ足丸ミアリ足ノウラ四角ナリ

唐櫃覆物ノ図



一 鑑形 解を飾り 少く 夏ハ 軍神と なる 儀也 鑑を 神降り する
 所也

一 解を 鏡の 儀に 似せし 儀也 祭の 儀に 似せし 儀也 紙を 垂
 けし 儀也

一 大なり 丸解 大小 二ツ 儀也 祭の 儀に 似せし 儀也 中
 の 儀に 似せし 儀也

中より 出さるる 儀に 似せし 儀也

一 松を 祭の 儀に 似せし 儀也 枝の 儀に 似せし 儀也 前ハ 廣斗 籠
 向ハ 昆布

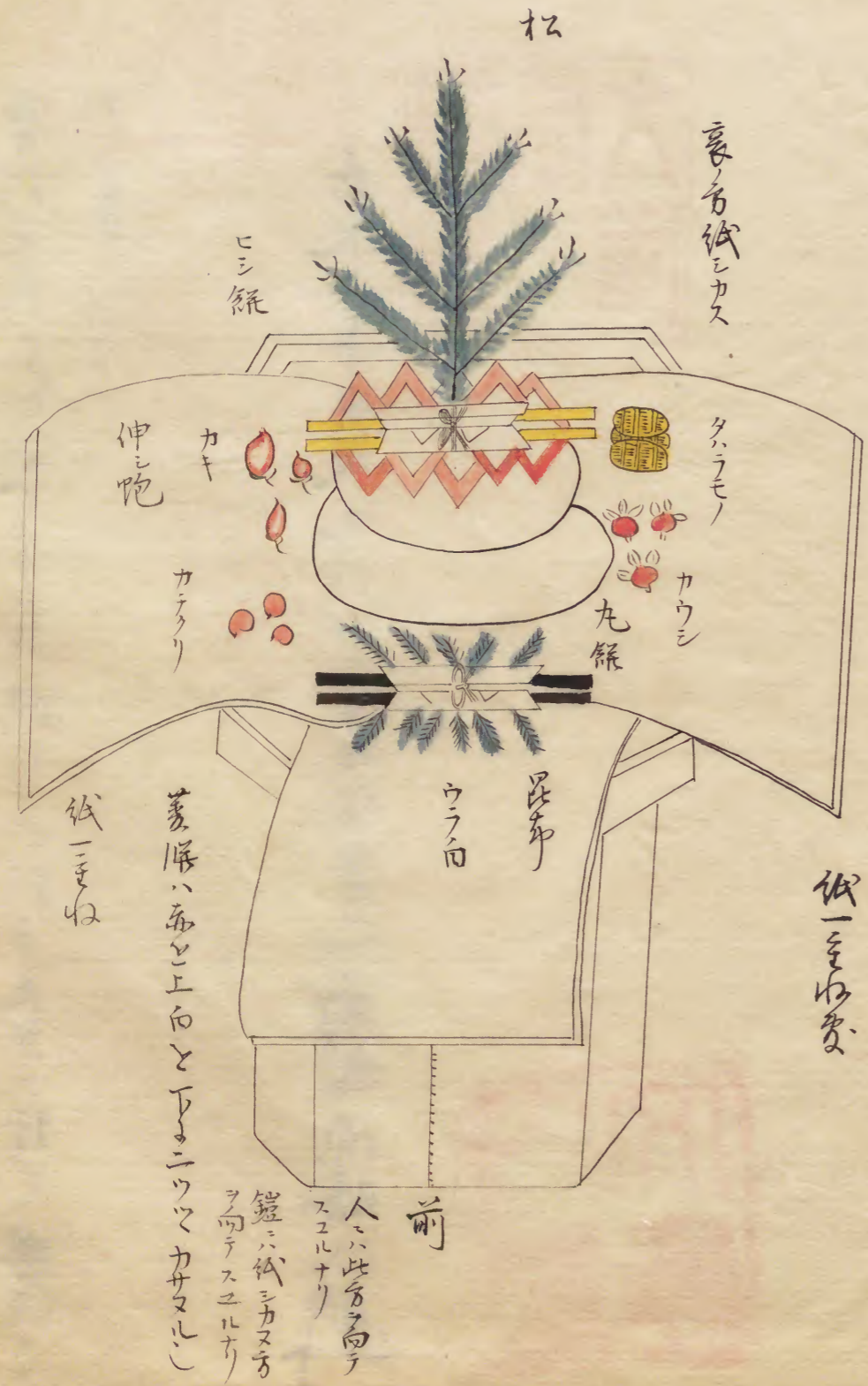
大なり 梅子 同なり 物なり 梅を 祭の 儀に 似せし 儀也 中
 の 儀に 似せし 儀也

一 中より 丸解 大小 一ツ 儀也 祭の 儀に 似せし 儀也 中
 の 儀に 似せし 儀也

同なり 物なり 梅子 同なり 物なり 梅を 祭の 儀に 似せし 儀也 中
 の 儀に 似せし 儀也

同なり 物なり 梅子 同なり 物なり 梅を 祭の 儀に 似せし 儀也 中
 の 儀に 似せし 儀也

鑑解飾



一 軍神ハ 天照大神 経津主神 健甕神 大物主神 事代主神

神武天皇日本武尊神功皇后八幡大神也足皆日本の軍神と
麻利支天石勒明王十二神将との様々天皇の神と佛法よ
り多事あり



嘉永三年庚戌九月十三日壬寅書之菊園源勝休



